

荒尾教会 統計一覽表 (単位:人)

年 度	現在陪餐 会 員 数	不在陪餐 会 員 数	小兒(未陪 餐)会員数	合 計	受洗者 (大人)	受洗者 (小兒)	集 会	
							聖日礼拝	祈祷会
1947								
1948								
1949								
1950	26	0		26	7		13	8
1951	32	10		42	6		19	11
1952	35	13		48	7		21	8
1953	35	21		56	7		23	10
1954	33	19		52	0		25	9
1955	30	21		51	2		26	11
1956	37	18		55	8		22	10
1957	27	8	0	35	0		19	10
1958								
1959								
1960	28	13	1	42	1		14	6
1961	28	12		40	1		24	6
1962	20	5		25			15	4
1963	16	11		27			16	4
1964								
1965	21			21	4		7	
1966	18	2		20			15	
1967	23	4	0	27			16	5
1968	24	4		28			15	5
1969	19	10	0	29	1		11	5
1970	18	9		27			10	4
1971	22	8		30	2		13	5
1972							16	
1973	23	8		31			15	
1974	23	10	1	34	1		15	
1975	24	4	1	29	0	0	15	
1976	25	4	1	30	1	0	13	
1977	23	3	1	27	0	0	15	
1978	23	3	1	27	0	0	17	
1979	22	5	1	28	1	0	16	
1980	21	4	1	26	0	0	15	
1981	22	4	1	27	1	0	14	
1982	22	4	1	27	0	0	14	
1983	21	5	1	27	0	0	14	
1984	26	5	3	34	1	0	15	
1985	26	5	3	34	0	0	14	
1986	27	5	0	32	1	0	15	
1987	27	5	0	32	2	0	16	
1988	27	5	0	32	0	0	16	
1989	27	5	0	32	0	0	15	
1990	27	5	0	32	2	0	17	
1991	27	5	0	32	0	0	19	
1992	28	5	0	33	1	0	(18)(14)	
1993	28	6	0	34	0	0	13	
1994	29	6	0	35	1	0	14	
1995	29	6	0	35	0	0	12	
1996								

荒尾教会略史

(前史) 1946年 宮崎滔天と母・兄弟がキリスト教に入信、家庭伝道を開始

1946(S. 21)年10月 宮崎貞子姉郷里荒尾に帰り伝道の祈りを始める。

11月14日 宮崎貞子姉宅にて最初の家庭集会

浅野順一牧師、松木治三郎牧師を迎えて開かれた。

1948(S. 23)年12月 (クリスマス)

最初の受洗者3名 鈴木みさお姉、高崎スミ姉、阿武永子姉

1949(S. 24)年 4月 伝道所開設

川崎嗣夫牧師就任

会堂建築計画決定

1951(S. 26)年 4月26日 献堂式 第二種教会設立

1952(S. 27)年 3月30日 牧野富士男牧師就任

1953(S. 28)年 9月 1日 宮崎貞子姉上京する。

1956(S. 31)年 4月 浜辺達男牧師就任

1961(S. 36)年 4月 田中従夫牧師代務者就任

1963(S. 38)年 4月 井柳福次郎牧師就任

1965(S. 40)年 4月 田中従夫牧師代務者就任

1966(S. 41)年 4月 樋口義也牧師就任

1971(S. 46)年 4月 岩高澄牧師就任

1974(S. 49)年 4月 小平善行牧師就任

1982(S. 57)年 5月 新会堂建堂式

1996. 10.
2002. 3

50周年記念
小平善行 謹誌

歴代教師からのメッセージ

荒尾教会の将来のために

川 嗣夫

五月二十六日ペンテコステの主日、その夕べ私たち夫婦は四十四年ぶりに御教会をお尋ねする機会が与えられた。小平牧師、園田・中尾両長老をはじめ教会員の方々と親しく荒尾教会の初期の時代の兄弟達のことを憶えつつ、懐かしい思いをもって、お話し合うことができたことは本当に神様のお計らいによることであつたと心より感謝している。その席で今年には教会伝道開始五十年に当たるので、一筆したためるようにとのことと喜んでおこたえすることになった。

故郷の伝道の志をもっておられた宮崎貞子長老は自宅、宮崎記念館を開放されて当時の熊本坪井教会（現在の錦ヶ丘教会）の松木治三郎牧師を迎えて礼拝が守られることになった。それは昭和二十一年秋のことである。そしてこのことが荒尾伝道所の始まりである。二十二年秋シベリヤの抑留から復員した私は松木先生と坪井教会の兄弟姉妹達に同行し荒尾伝道所の方々と祈りを合わせる時が与えられた。その翌、二十三年に神学校に復学し卒業年次の夏期伝道地として伝道所に迎えられ、昭和二十六年四月より伝道師として赴任することになった。その時、今でも私の脳裏に焼きついていることは主イエスが荒尾の地に立たれて私を差し招いておられるそのみ姿が幻想のように思っておこされるのである。

その頃の伝道所のメンバーは、宮崎長老御一家、母上美以さん、豊子さん、建君、修君、婦人会では大場、高崎、鈴木、橘、中尾の姉妹方、青年では、園田、山野、水本、井原、外井兄弟、松尾姉達、そして後に大牟田正山町教会から転入会した後に伝道者となった岩岡兄で、数は多くないが共に神の家族として心を合わせ地元の伝道に熱意をもって当たっておられた。この小さな群れは是非ともこの地に礼拝堂を建て福音の前進に仕えようという祈りにおいて結集し、その願いの実現のため力を注ぐこととなった。このことのために母教会としての坪井教会の長老会や教会員の方々の物心両面にわたるご尽力を忘れることはできない。

総工費七十万円、礼拝堂並びに牧師館。地元で工費の半分を負担し、二十七年三月に竣工、四月献堂式を迎えることになった。当時、増永の丘の上に建てられた教会堂、それは荒尾の人々のため「世の光・地の塩」として、主がこれを祝福して下さったものとして、教会員一同の喜び、これに優るものはなかった。

教会はこの働きに当たって当初より幼な子達への伝道の志を持ち、幼稚園を建設することが願われていたが、それは荒尾市の希望でもあり、四百坪の土地が与えられた。この業の実現に当たっての宮崎長老のご尽力を忘れてはならない。幼稚園は今年四十四回の卒園児を送り出されている。園児の中には親子二代にわたっている方もあると聞いている。

この度御教会を訪れ、その五十年の歩みは社会全体の大きな流れの中にあつて荒尾の町もその周辺も大きく発展していることをみたものであるが、教会は一貫して福音の旗印のもとにその業が進められていることを深い感謝をもって憶えさせていただいた。

当夜の懇談の折、小平牧師のお話しの中に、荒尾教会はその始めから独立自給の教会の精神に立って伝道が進められてきたことを述べておられた。このことはこれからの荒尾教会の歩みにとって大きな力であると思われる。そしてこの精神は、宮崎長老、そして母教会である錦ヶ丘教会の伝統を受け継ぐものである。即ち神のみ言葉が正しく宣べ伝えられ、聖礼典、洗礼と聖餐がキリストのご制定に従って行われる、この改革長老教会の信仰とそれに基づく信仰生活が受け継がれていくことこそ、現在の教団のヒューマニズム優先の在り方の中で、この国に健全なキリストの教会が形成されていくことのためにどれほど大切なことかご一緒に力を合わせてまいりたいと思ふ。

松木先生は事ある毎にローカル・チャーチ、地方教会の健全な働きが大切なことを強調されていた。荒尾教会で信仰を与えられた方々が、その遣わされた先の教会でよい働きをされている。このことは一粒のからし種が大きく成長していることとしるしに他ならない。

先に述べた献堂式の前、私たちも新しい家庭が与えられ、教会員の皆様も喜びを共にし、将来に向けて希望をもっていたのであるが、その数カ月後、病を得、十分な奉仕ができませんまま二十八年春御教会を去ることになった。その後、幸いにして健康を回復し、静岡県の富士教会で二十七年間、東京の本郷教会で一六年間と、荒尾教会に仕わされてから、計四十五年間、いと小さきものながら主の教会に仕えることが許された。これらの歩みは、初陣の若い伝道者を励まし、祈りをもって支えて下さった荒尾教会の兄弟姉妹の祈りなくしてはあり得なかつたことを心より感謝している。

遠くにありて想う

牧野 富士夫

私と妻光子が荒尾教会で働いたのはもう四十年以上も前のことです。思い出せば懐かしさが泉のごとく湧き上がってきます。

一九五三年五月四日、東京で結婚式を挙げ、私の郷里で二日を過ごし、二十四時間の急行列車で七日、荒尾駅に着

く予定でした。ところが八幡駅で神学校の先輩につかまって、無理矢理、若松教会に一晚泊めさせられ、荒尾駅で待っていた教会員の方々には待ちぼうけをさせてしまい、翌日、南荒尾の駅で今も懐かしい皆さんに初めてお目にかかりました。(その殆どの方は既に主の御国に旅立たれましたが、生きている人達と同じように、私の心の中に今も生きています。)

そのような訳で、教会員の皆さんとの出会いは最初から失敗でした。それでも神学校を出たばかりの駆け出しの私を暖かく迎えて下さいました。私は毎週土曜日になると、明日の説教に苦しみ、「説教ができない」と泣いてばかりいました。そんな私を支え、力となって下さった二人の方を、忘れることはできません。

その一人は、堀司馬太郎さん。当時七十歳を越えていました。長洲駅の隣で小さな食料品の店を、朝六時から夜は十時の終列車の通過後まで開いており、奥様はリュウマチで寝たきり、長男は結核で殆ど働けず、一人で店を守っていました。それでも日曜には必ず店を閉じて出席。一番前の席に座って説教が始まるとすぐに大船をこいでいる。そして、礼拝が終わるとつかつかと前に出てきて、私の手を握り、「先生、今日の説教はよかった。」……。ほかの人なら怒り出したくなる場所ですが、堀さんの巨体とそれに釣り合ったスケールの大きな人格、老年の逆境と重荷を包みこんで一つの愚痴も言わぬその生き方は、私に無言の力を与えてくれました。堀さんは日露戦争後、若くして朝鮮に渡り幾度も修羅場を信仰を持って切り抜け、かなりの財を成した方です。しかし、三年後に店も行き詰まり、大学教授の弟さんを頼って一家上京。長洲の駅に見送りに行ったら、手に数匹の金魚の入った金魚鉢をぶら下げて、「東京へ行ったらこれでもう一度再起するのだ。」悲壮な様子も全く見せずに申され、お別れを致しました。その後、一年も経たずに銭湯に入浴中浴槽の中で倒れ、患難の中にも雄々しい生涯を終えました。堀さんの死去の知らせの後、その前夜、自分の通っている東京の教会の醜状を訴え、「これが私の涙の痕です。」と、涙ににじんだ手紙が届きました。私には天からの手紙のように思えてなりません。今もどこかに保存してあります。

もう一人の方は、白谷マツエさん。当時、宮崎先生のお宅の家政婦のような仕事をしておられました。先生が荒尾を去られた後、二・三里も離れた親戚に身を寄せ、そこから、歩いて礼拝。祈禱会には必ず出席、いつも涙を流し熱烈な祈りをして下さいました。説教にも伝道にもいつも行き詰まって、機会があれば夜逃げでもした位の私でしたが、「この人を見棄てて絶対に夜逃げすることはできない」と踏み止まらせてくれたのは、重荷を負わされながらも強く信仰に生きる白谷さんの存在でした。六年前の五月、是非白谷さんの元気な内にと荒尾を訪ね、皆様と懐かしい再会をさせて頂きました。その一ヶ月前に白谷さんは、主の許に召されたと聞いて、とても残念でした。

妻は着任早々、幼稚園の主任として、月曜から土曜まで働き、日曜には教会学校から礼拝の奏楽と、在住の四年間は昔の海軍の歌「月々火水木金」の日々でした。驚いたのは子供たちの元気で、雨の日には裸足で幼稚園に

やって来る、喧嘩をする時は、両手に下駄を握って、「打ち殺すぞ」とどなる。しかし心はとても優しく、歌を歌う時には、眼をキラキラ輝かせて全身で力一杯歌う。その後私達はこんな元氣のよい子供に出会ったことはありません。親戚の小父さんの死を悲しんだある子供が、妻に取りすがって「光子せんせ、死ぬことでけん」と訴えた言葉は、今も私の心に残っています。

一緒に幼稚園で働いた大内マサ子さん、松下敏子さん、村上良子さん。私達はその後札幌の郊外で二十六年間、開拓伝道と幼稚園に携わりましたが、あんなに気持ちよく苦勞を分かちあったことはありません。

その他、思い出す人、出来事はとても書き尽くすことはできません。ヨハネ福音書二一章二五節の心境です。最後に私達の近況。七年前、六十歳を過ぎた私達は都会の教会に安住していません、牧師を招くのが困難な田舎の教会でと思い、北海道南部の利別教会に赴任しました。その前後から妻は体の不調を訴え、着任後二ヶ月余で婦人科のガンと分かり、三年五ヶ月、十四回の入院ののち、三年前に主の許に帰って行きました。牧野牧師も傷心の中にこの地を去るであろうと、多くの信者は思ったそうですが、私はこの地に止まるとの決意を聞いて、ある老信徒夫妻が国道沿いの宅地二二八坪を寄付して下さい、来年九七年春、会堂五十坪、牧師館三十坪の思い切った近代的な建築に着工の予定です。総工費六千万円の予定です。どうぞこのためにお祈り下さい。

荒尾教会の思ひ山

浜辺 達男

荒尾教会の創立五十周年を心からお祝い申し上げます。一九四六年十一月十四日に宮崎宅で始まった家庭集會が、伝道所を経て、教会にまで発展した五十年の歩みはただただ神の特別な恵みによるものと感謝しないではおられません。この五十年の歴史の十分の一の期間だけ、伝道者として参加できたことを心から喜んでいきます。一九五七年から一九六二年まで、卒業直後の未熟な私が担当した五年間はよき成果を上げたとはとても思えません。長い鎖の中の一つの輪をつないだ程度のことと理解しています。

当時一緒に祈り、一緒に話し合った方々の顔が次々と浮かび上がってきます。多くの信者さんたちが婦人で、高崎さん、橘さん、前田さん、大庭さん、寺島さん等の皆様です。地域に伝道を強力に進めるための力が色々な点で不足していましたが、何よりも指導者であるべき私の力不足が大きかったと、悔やまれてなりません。今な

らば、どのように取り組むべきかが、もっと適切に判断できたであろうに、と思われれます。私が在任していた頃は、丁度日本の産業構造の変化、即ち石炭産業から石油産業への大転換の時期に当たり、九州にあっては三井三池闘争が、新聞に大きく取り上げられる時期に当たりました。一九五九年秋から炭住街を舞台に、指名解雇の是非をめぐって、炭坑マンとその家族が、隣り同士で口論したり、相互に不信を増していった様子が、あちこちで見られるようになりました。同年の暮れ近くになって、日本の労働界を代表する「総評」がこの闘争を応援する決定が議決して、翌年一九六〇年の秋まで紛争は一年に及びました。

このように地元を襲った嵐のような社会問題が、未だ十年余の歴史しか経ていない荒尾教会にまで影響を与え、その争いが教会内部にまで浸透してくるのを防ぐのは全く不可能なことでした。教会全体の一致を得ることが段々難しくなっていました。当時二十代後半の若い牧師であった私も、血気にはやり、正しい判断ができていたかどうかは、今考えるならば、はなはだ疑問である、と言わざるを得ない心境です。

このような嵐の中にあつて、付属幼稚園の経営も大きな難問にぶつかっていました。園児募集がうまく行きませんでした。それでも廃めなかつたのには、教会員の頑張りがあったからだと思います。妻敬子も幼稚園教諭に加わりました。今日まで幼稚園が継続している様子をうかがい、あの時に細々ながらも続けて来て、本当によかったと思っています。またかねてから献金を重ねてきた上で、ついに現在の敷地を購入し、さらに登記することが出来たのは私の任期中のことでした。皆さんの努力の賜物と本当に感謝しました。まだ南隣りは広い原っぱと古い校舎が残っていました。山羊を飼うことが出来ました。かわい子山羊も生まれました。

当時荒尾で生まれた公平は、現在青森県弘前市の中学校の先生をしています。既に、三人の子供の父親でもあります。次男潤平は横浜で外資系の会社に勤めています。私たちは、かつて中学・高校生時代から通っていた横浜上原教会に毎聖日出席しています。敬子は教会婦人会で活躍し、奏楽も担当します。私にとつて、荒尾教会での五年間の経験は、それ以後歩んできた私の人生を規定するほどの、大きな影響を与え続けてきました。ここで経験を始めとして、他の教会や学校でさらに多くの経験を積み重ね、現在の私の人間形成が構成されて来たのだ、とつくづく考えています。今はキリスト教主義大学にあってキリスト教そのものが、多くの学生にとって本当に力あるものとなるよう励んでいます。

今荒尾教会でお働きの小平善行牧師夫婦をはじめ、教会員の皆様のご健闘を、心からお祈り申し上げます。

此の度貴教会は創立五十周年を迎えられる由おめでとうございます。私は一九五四（昭和二十九）年四月から一九六六（昭和四十一）年三月迄の十二年間、熊本坪井教会の牧師を務めさせていただきました。この間、荒尾教会との関係を断続的に持たしていただきました。

あのなだらかな丘の上の教会堂内外の光景が目には浮かびます。山羊が飼われていたこともあり、山羊の乳を食料の補給とされた牧師先生のご苦労も思い出します。私も時々御教会が無牧の時などに礼拝説教に招かれ参上したこともあり、しかし何分にも三十年以上昔のことでもあり、思い出は漠然として、とても文章に誌しような「記憶のまとまり」にはなりません。古い手帳など繰ってみましても忘れてしまったことの方が多く誠に申し訳ありません。牧師をなさった方の中で唯今東洋英和女学院大学で宗教主任をしておられる浜辺達男先生には、東北で神学会の折にお逢いして、坪井教会と荒尾教会の合同の夏期修養会が楽しかったことなど話し合いました。四日市教会の牧師井柳福次郎先生には改革長老教会協議会で何度かお目にかかり、御健闘ぶりに嬉しく思いました。必ず年賀状を下さる工藤真二兄は熊大（花陵会）出身で、唯今も荒尾在任です。オーガニストをして居られ、唯今は高松在住の平尾昌子様（旧姓がどうしても思い出せません）が東北旅行の序に、仙台東一番丁教会の牧師館をお訪ねくださいまして、折柄の七夕祭りの御案内をしたこともあり、お名前がどうして浮かび上がりません）に心から御礼を申し上げます。その意味でも記念誌の発刊を今から楽しみにしています。御忘症とやらにとりつかれまして申し訳ありませんが、これでお許し下さい。（老生現在満八十七才、健

八十路翁

回想

井柳 福次郎

荒尾教会が一九四六年に宮崎テイ姉のお宅で伝道を開始して以来、宣教の御業を押し進められて五十年の記念すべき時を迎えられたことに主の限りない御恩寵と諸姉の祈りの労苦を覚え心より感謝致します。

神学生時代、宮崎姉と同じ東京の美竹教会で教会生活を許された私に、荒尾教会を奨めて下さったのは同姉と恩師浅野順一先生でした。先ず、夏期伝道ということになって一九六二年の夏に荒尾教会を訪ねた時が最初の出会いでした。

ドラマチック？な夏期伝道を体験して帰京し、荒尾教会に赴任しましたのは翌年の四月でした。三池炭鉱労働争議の直後のことでその波紋は教会にも伝わっていました。独身生活の夏、太田俊雄先生（後の敬和学園高校長）が来訪一泊され、二人用の蚊帳の中に納まって互いに語り一夜を過ごしました。その秋、三川鉦の爆発事故があり、四五八名の犠牲者が出ました。全国からのお見舞品の分配や、関係組合員の御宅にお伺いしました。教団から派遣された戸村政博先生を御案内したり、浅香敏雄先生と映画会も行いました。月に一度の聖餐式のある時は、熊本から田中従夫先生が来て下さったのですが、近くの駅から教会の坂までは自転車です。送迎申し上げて諸姉と共に聖餐を守りました。また教会学校とクリスマスページェント、幼稚園の遠足や運動会等々思い出は次々とよみがえってきます。

こうした尽きぬ楽しい思い出の背後には教会に仕える諸姉の厚い祈りと支えがあったことを忘れません。独身時代の半年、そして結婚後、私共家族が主に仕える諸姉から暖かい交わりと励ましを沢山頂きました。都合わせて感謝致します。荒尾在任中に生まれた長男（基名）も今は結婚して聖和大学の教師として、妻みどりもささえられてこひつじ幼稚園にそれぞれ勤務しております。

教会から一望出来た有明海の景観、遠浅の海と空を真っ赤に染めて沈む大きな太陽、遙かに霞む島原半島と山々、素晴らしい神の作品の中で、教会と幼稚園を囲んで集う暖かい心の人々の中に過ごした幸いな日々であったと想います。何回となく映画に誘って励まして下さった久留米の田中道宣先生、楽しい交わりのなかでいろいろ教えて頂きました熊本地区の牧師方、プリンク先生のことわすれることはできません。

荒尾教会が今後とも主の豊かなお導きのもと六十年・八十年・百年に向かって更に前進されますよう念願して次の聖句を贈り記念の言葉とさせて頂きます。

「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。」（ヘブライ人への手紙十三章八節）

終わりに荒尾教会諸姉お一人お一人のお名前とお顔を回想しつつ、小平先生のお働きとご家族の上に、荒尾教会の上に心より主の恵みと御祝福をお祈りします。

荒尾教会創立五十年おめでとうございます。

もう二十数年も前の事で、当時の資料も何もなく、あやふやな記憶を頼りに記事にいたします。私が、御教会に参りましたのは一九六七年だったと記憶しています。六四年神学校を卒業したの私は、坪井教会の田中従夫先生のご指導のもとで、伝道師として奉仕させていただきました。田中先生の仙台東一番丁教会の招聘により、坪井教会は暫く無牧を経験いたしました。私は、当時の原水伝道所主任者として、また坪井教会代務者として勤めさせていただきましたが、坪井教会が、現錦ヶ丘教会斎藤先生を招聘されましたので、自分の身の振り方を決めなければならぬ時でした。

橘姉と、松尾姉が、菊陽村原水まで招聘状を持って御出で下さり丁重な招聘をいただき、身の引き締まる思いがいたしました。当時、荒尾教会も井柳先生後、無牧でした。私は月一度、バスやバイクで原水から、荒尾へ応援に出かけていました。そのような関係で、ここに神様のみ旨があると信じ、お受けいたしました。当時の教会は西側の海岸側からの道が、教会正面に伸びていましたが、ほとんど利用されていない状態で、私たちは、もっぱら東側からの崖に沿った、狭い道を利用して、自動車を乗り入れていました。

教会は各聖日毎の御言葉によって立つことを純粹に信じ、ひたすら、説教の準備に多くの時間を費やしていました。一生懸命説教をしていたら、必ず、聞く耳を持つ人を増して下さる。という思いで、毎週の礼拝を迎えています。一九七一年、現在の大阪相川教会に赴任いたしました。短い間ですが、若い伝道者を忍耐して、育てて下さったと感謝しています。在任中、長洲から、松尾ぎろ子さんが、求道されるようになり、クリスマスに洗礼をお受けになり私が授洗した最初の方となりました。坪井教会は、荒尾のために、伝道応援として毎月伝道費を下さいました。母教会の熱いお祈りがあったことを記憶していただきたいと思えます。

一九六九年頃、八月末に大きな台風が有明海を北上いたしました。教会の東側を通る台風には教会は被害を受けませんが、有明海を通ったこの台風には、会堂、牧師館共に屋根瓦が飛ばされ、山国育ちの私はとても怖い思いで台風が一刻も早く通過するようにひたすら待ちわびました。台風通過後、何もなかったような朝を迎え呆然としていたところへ、橘姉はお弁当を持って駆けつけて下さいました。教会の屋根瓦は、教団からの台風見舞金で修理したように思います。

教会学校は、楽しい時でした。幼稚園の礼拝の他には、近くの子供さんがCSに集いました。ある朝には、一人の子供が、新聞に包んだ物を親からのことづてと云って戴き物をしましたが、その朝取れた生きた魚でした。これも思い出の一つです。

当時の教会付属幼稚園は、無牧の影響で、園児二十名にもとどかない、いつ閉園になっても不思議でない幼稚園でした。長老会でも、もし、伝道に不要なら、閉園してもかまわないという、意見も聞かれました。私にも意見を求められましたが、荒尾市街から、かなり離れたところで伝道の使命を果たしていくには、幼稚園の働きは大きいと考え、めぐみ幼稚園の継続を決意いたしました。とは言え、園児募集の激戦区である荒尾では、駆け出しの若い牧師には、並大抵のことではありませんでした。橘姉妹と松尾姉妹は、園児募集のため、私達夫婦を、案内して下さり、入園しそうな幼児さんのいる家庭を訪問、入園をお願いいたしました。家内は、主任としてカリキュラムの作成、若い先生方の指導にあたりました。出産育児が重なり苦労をかけたと思っています。ほとんどの園は、スクールバスで送迎していましたが、めぐみは、私がキャロル三六〇を運転して、朝夕の送り迎えをいたしました。玉名市の手前の池（桜堰といいましたか）の所まで、北の方は、四ツ山まで行ったように覚えていきます。

月山に、蔵原さんという方がいらして、お子さんをめぐみに出して下さっていました。お父さんは、学校の先生で、お母さんは、市民病院の総婦長をされていたと思います。ある朝、ご自分の何かの検査のため、造影剤を入れるため、部下の看護婦さんに指示して、ベットに上がりましたが、その途中で、意識不明になり、数日後、御亡くなりになりました。意識不明というのを聞き、園児さんを送った後、市民病院にお見舞いに参りました。病室に入った途端、圧倒されました。ちょうど、亡くなられた直後の時刻で、ご主人と三人の子供さんが、ベットの脇で泣いているところでした。葬儀は月山のご自宅で行われましたが、めぐみの園長ということで、弔辞を述べさせていただきますました。その後、蔵原さんは、夜教会を尋ねて下さり、お話をいたしました。熊本市内に移られたと聞きましたが、あの時のことが、印象強く思い出されます。その他、教会の方々、めぐみ幼稚園関係の方々、教会の上に住まわっていた肥後銀行荒尾支店長さんご夫妻、当時中学校教頭先生畠田さんご夫妻、他多くの方のことを思い出しますが、紙面がありませんので失礼させて戴きます。

荒尾教会の今後の、ご発展をお祈いたします。

荒尾教会の思い出

岩高 澄

創立五十周年を心からお喜び申し上げます。敗戦後の間もない頃、混乱した日本社会にあって大きな希望として、荒尾の地に福音の種が蒔かれ、今大きく根を下ろして立派に成長した荒尾教会の姿を思い、主の祝福を切に祈るものです。

私は、一九七一年四月から三年間、荒尾教会に牧師として在任致しました。事情があって前任地を辞した私は、「どこへでも参ります。」と白紙委任状を教団の人事委員会に出しておりました。

そこへ当時九州教区議長であられた田中道宣先生から荒尾教会の話が教団に入り、ご指示を頂いて、荒尾に赴任するに至ったものです。

田中道宣先生に初めてお会いした時、実は荒尾教会は樋口義也牧師の後任を求めらるにあたり、幾つかの条件を出しておられたと伺いました。

その条件とは、

- ① 地方教会に使命を持つものであること。
- ② 幼稚園の園長または、設置者の経験があること。
- ③ 奥さんが幼稚園教諭の資格があること。
- ④ 車の運転ができること。

などであったようです。

田中先生は、「そんな条件に叶う人があるかどうか・・・」と言って、教団で確認したところ、「あなたはすべての条件に叶っていたので驚いた。」と言っておられたのを思い出します。

殊更、優れた事柄ではないまでも、当時の荒尾教会が必要とする人物として迎えられたことは、まさしく神の導きであったと思ひ、感謝したことであります。

私の在任期間はわずか三年、今にして思えば幼稚園に明け暮れた毎日であったように思います。

着任当初は普通免許しか持たない私でしたから、園児の送迎に、朝に午後に普通乗用車で七往復のピストン運転をしなければなりませんでした。

これではたまらなないと、中古のマイクロバスを購入し、荒尾自動車学校で大型免許を取得致しました。

保育室はと言うと、十畳余りの部屋で年少組の保育がなされ、運動場は随分広い敷地面積がありながら、三段の土地になっている。

放置できない思いであちこちをお願いして廻ると不思議に道が開かれて、次々と問題が解消されて行きました。そして、遂には私共の生活の場のことを教会の皆さんが心配して下さい、牧師館まで建てていただいたことでした。

この外、園児募集のこと、情緒障害のお子さんと与かったこと、数々の思い出が昨日のことのように蘇って参ります。

今にして思えば、これらのことはとても私の力に余ること、全ては神の働きであり、私はその指の業に与かったにすぎないものであります。

それにしても、その間の私を、励まし祈って支えて下さった荒尾教会の皆さんを今も思い出して、ただ、ただ、感謝の思いで一杯です。

すでに天に召された方もあると伺い、寂しく思っております。

「立つ鳥後を濁さず」と申しますが、がさつにも私は大変後を濁したまま荒尾を去ることとなってしまいました。

幸、私の後輩である小平善行牧師が後任としておいで下さり、今日まで長きに亘って伝道、牧会の任に当たって下さることは、私の喜びとするところです。

宣教百年へ向けて後半世紀の荒尾教会の歩みがより確かなものとされますように、心から祈りつつペンをおかせていただきます。

歴代牧師の思い出

松木治二郎先生時代の思い出

畳の上に座して、松木先生の御説教を聞いていると、足が痺れます。足の痺れに心が奪われると、先生の目が私の方を見られたように思えて、一生懸命我慢し、お話しに集中しようと思いました。坪井教会の礼拝を終えてその伝道所だった宮崎先生の家（孫文記念館）へおいでの夜の礼拝でした。十三才の夏、私は初めて先生にお会いしました。先生は、神様みたいにも何でもお見通しだと畏敬の思いで先生の眼差しを仰いでおりました。

宮崎貞子先生のお導きと、松木先生のお導き、加えて教会へ行くよう協力してくれた母に支えられ、神様の恵みを受け、十五才のイースターに、松木先生より受洗しました。熊大在学中、坪井教会でも、先生のお導きを受けました。教会には熊大の学生が、花陵会館（キリスト教宿舎）在住の人達を中心に、松木先生を慕って多く集まってきました。聖書研究会も盛んで、私も出来る限り参加しました。

夏の修養会が、阿蘇山麓の内牧温泉でありました。早朝礼拝は、朝霧の中、近くの川辺でありました。先生の近くで礼拝したくて、宿を出られる先生の後について行きました。

修養会の帰途、外輪山の大観峰に、内牧の町から歩いて黙道を登りました。先生から、足下に気をつけるよう声をかけて頂いて嬉しかったことを覚えていきます。大観峰は、遠見ヶ鼻ともいいますが、その先端で、阿蘇山一帯を展望し乍ら、おにぎりを頬ばってられる松木先生のお写真や、早朝礼拝の写真など先生の写ってられる写真は、私の宝物です。

松木先生は、房総半島の漁師町、木更津教会の牧会をなさっていた若い頃の話をよくなさっていました。宮崎記念館の窓から、有明海の潮の香が匂い、漁師の舟が見える長閑な伝道所は木更津教会と重なるものがあったのでしようか。宮崎貞子先生と共に、荒尾教会の礎を築いて頂いた先生でした。

ロマ書研究の第一人者として関西学院大学教授となられ、坪井教会から、伊丹教会へ牧師先生として転出なさった先生は、数多くの著書を残しておられます。長寿を全うされ召天なさいましたが、荒尾教会のことも、終生祈りの中に覚えておられたと、先生の近くにいた方より伺いました。

多くの先達の祈りに支えられて、今日を迎えた荒尾教会の使命を改めて思います。私は主の恵みにあづかった喜びと感謝を、周りの人々に伝えて生きたいと、松木先生の写真を前に誓いました。

川 剛夫先生時代の思い出

光陰矢のごとしといわれるが、荒尾教会創立五十周年を迎えるにあたって、永い歳月の思い出が脳裏に去来する。荒尾教会は熊本坪井教会（現・熊本錦ヶ丘教会）の荒尾伝道所として発足し、始めは月に一度ほど熊本から松木治三郎牧師（当時）がお見えになって礼拝を守り、松木先生がお見えにならない聖日は、宮崎貞子先生が奨励をされ聖日を守っていたが、専任の牧師を招聘したいという祈りが叶えられて、神学校を卒業したばかりの、新進気鋭の川 剛夫先生をお招きすることができたのは、大きな喜びであった。当時はまだ教会堂は無く、宮崎先生のお住まいであった宮崎記念館の二階で、礼拝や祈祷会等の集会を守っていた。川 先生はまだ独身で宮崎記念館の一室でお暮らしになっていた。当時川 先生が公私に互って、最も影響を受けられたのは、宮崎貞子先生であると同ったことがある。私たち教会員も宮崎先生や、ご母堂の美以姉から、いろんなことを学ぶことができたことを感謝している。特にその信仰と人格が私たち若者にとっても、大きな励ましになったと思っている。宮崎先生は当時荒尾高校の英語の先生だったこともあって、多くの高校生達が教会に集っていた。川 先生も若かったし、これらの若者達と意志が通いあったのであろう、現在とはまた一味違った形で活気に満ちあふれていた。その若者も就職や結婚などで荒尾を離れた人が多いが、現在も熱気にあふれた青春時代を懐かしんでいるに違いない。

川 先生と宮崎先生が、最も気にかけておられたのは家庭集会の延長のような教会であれば、宮崎先生が何らかの事情で、荒尾を離れるような事態にもなった時、教会堂が無い根無し草のような状態では、それからの伝道や集会に支障を来すということであった。教会堂を建てようという機運が盛り上がり、教会総会で決議され、具体的に会堂建築に踏み出したのである。

それから川 先生や宮崎先生と教会員一同の、献金と募金活動が開始されたのである。お二人の先生のご苦勞は、当時宮崎記念館に同居しておられた故白谷マツエ姉がよく御存じであったが、今となってはもうお話を伺うことができないのは残念である。宮崎先生は市議会にも足を運ばれて、会堂建設の趣旨と意義を説明し、併せて会堂が完成した暁には幼稚園を開設する旨陳情して、議会の理解を得、議員さん達からも献金をして頂いたことである。運動会などがある時は売店を開いて物品販売をしたり、教会でもアメリカの中古衣料や、日用品の販売などをして利益を積み立てたりしたことも、懐かしい思い出である。

教会員は若い人や高校生などが多くて、経済的には恵まれていない人が多かったが、それでも皆頑張ったと思う。レプタ二つ献金といって、友人や知人に一口二十円の献金をお願いしたこともあった。宮崎龍介さん（宮崎

先生の従兄）の夫人柳原白蓮女史が色紙と短冊を書いて送って下さったものを販売したこともあった。

土地は、橋正美姉のご主人の橋武徳さんのご尽力で、現在地を取得することができた。建築資金も、教団の援助や多くの方の祈りと献金などに支えられ、会堂が完成して献堂式を挙行することができたことは感謝である。

この会堂が完成し伝道の拠点ができた為、教勢も一段と発展し、幼稚園も併設されたこともあって地域に貢献できるようになった。それから間もなく、川 先生は八重子夫人と結婚されたが、限られた資金で建てられた為に、牧師館も無く、会堂の一隅の狭い一室を牧師室として使って頂いたが、当時は井戸も無い状態で近くの井戸から水を運ばねばならず、もちろん風呂も電話もまだ無いありさまであったので、随分不便で淋しい新婚生活であったと申し訳なく思っている。しかし川 先生はそんなことは意に介することなく、懸命に牧会に励まれた、そのお姿が脳裏に鮮やかに蘇る。また日常生活に不便な先生ご夫妻を気にかけて、何くれとなくお世話をされていた、宮崎先生、橋姉、高崎姉、白谷姉などのお姿が胸に焼き付いていて昨日のことのような気がする。

川 先生は神学校に在学中、学徒動員で入隊、終戦後不運にもシベリヤに抑留の憂き目にあわれ、猛烈な寒さの中を強制労働に駆りだされたりして、そのときの無理がたたったのであろう、また水も合わないこともあったのであろうか、健康を害され、体に激しい痛みを覚えられて、療養に専念されるため、荒尾教会を辞任されたのは残念であった。

先生はその後療養の甲斐あって健康を回復され、再び牧師として永く活躍されたが、今年隠退され、五月末に夫人と共に来荒されたが、まだ若々しくお元気であるとお見受けした。隠退はされたがこれからも、力の続く限り神様の御用のためにお役にたちたいと決意を語っておられたので、健康に留意しての今後のご活躍をお祈りする次第である。

（園田 秀一郎）

牧野富士男先生時代の思い出

荒尾教会に牧野先生をお迎え致しました。生まれたての教会に神様はお若い先生方をお送り下さいました。

クリスマスを迎える時に私は毎夜のことですが、カンテラを持って夜の海へ母と又近所の方を誘い合って貝取りに出掛けました。四時間経って遠い沖から肩で担ってやっと帰り着きました。ホッとした時クリスマスの讚美

歌の大勢の歌声の歌声にびっくりしました。クリスマスキャロルの皆さんでした。

クリスマスおめでとうございます。始めての事におろおろしましたが、何の備えもなかった事を詫び、喜びと感謝とで、一杯でございました。中学生・高校青年の方また、女性もおられたでしょうか、今改めて神様のみ使いの方に厚くお礼を申し上げます。牧野先生は路傍伝道に熱心に励まれました。私は家の都合で礼拝出席はほんの僅かで、礼拝当番を与えられました時のお話しはアブラハムが我が子イサクを捧げる処でございました。

アブラハムの信仰は私達の信仰ですと傲慢なお祈りをしたことを忘れられません。真駒内伝道所として献堂のお働きをなさいました。牧野先生は、三十年に近いお働きをなさいました。三十三年振りに荒尾教会をお訪ね下さいました時一番にその時の事を申し上げましたが、学ばなければならぬ信仰の歩みと年を重ねて参りました。今どれ程のものであるか罪深い者であり、ざんげと悔い改めの繰り返しでございます。三十年の御献身の中には、筆舌につくし難い御病氣のお苦しみを負われました。神様は、絶えずお励ましと御配慮をなさいました事を、そして奥様の切なる御献身と御介抱を信じて感謝でございます。

三十三年振りの御様子は昔と少しも変わることはない明るいほほ笑みの絶えないお顔でいらっしゃいました。奥様も少しもお交わりのないお若いお姿に驚きました。

先に召されました白谷姉と榛名に宮崎先生をお見舞いして北海道へ牧野先生をお尋ねしたいと念願でございましたが、果たせませず残念でございました。旅行から北海道でお帰りになり人が行きたがらない教会へお働きをなされる事になっていました。これからは少しでも暖かい処においで下さればいいのにと思ったこともございました。健康でいられた奥様の御病氣のお知らせに驚き、御回復の祈りと願いを神様はお聞き届けて下さいます様にと切なる日々でございました。牧野先生の熱い祈りと御介抱の甲斐もなく奥様は天に召されました。

どんなにお悲しみの日々でありました事かお慰めする言葉も見出さなまま先生のお手紙を繰り返して拝見致しております。荒尾教会創立五十周年を迎えるに当たって牧野先生の受洗のおすすすめ、そして決意、主の十字架のお救いに生かされていきます。信者としての歩みは誠に愚かな歩みでございますが、主はこの愚かさをいつも恵と導きをお与え下さいます。

神様にそして牧野先生に感謝を捧げます。貧しかった荒尾教会での御不自由を耐えて下さり五年間は奥様にとっても闘いの日々であった事と思えます。その御献身に改めて感謝を捧げますと共に、召されました奥様の御冥福を心からお祈り申し上げます。牧野先生のお悲しみとお淋しさを神様のお慰めの中に乗り越えられました、お励みなさいませ様に祈り申し上げます。唯今小平先生二十二年という尊い御献身を感謝いたしております。宮崎先生の荒尾に教会を、子供達に愛をと御希望とお祈りがそのままに受け継がれて五十年という尊い年月を与えら

れて、これから百年を目指しての歩み出しておりますが、歴代の尊いお働きを下さいました先生方へ喜びと感謝を申し上げます。

(中尾ツヤ子)

浜辺達男先生時代の思い出

眼鏡の奥の人なっこい瞳が、にこやかに微笑みかけ、明るい声で語りかけられていた浜辺先生の荒尾教会の日々は、きつと大変だったろうと、今、私は、五十年誌の為に、住時を振り返って思っております。

浜辺先生は、最初の牧会が荒尾教会でした。敬子夫人と結婚なさったのも荒尾教会時代。長男の公平君が誕生され、とても可愛くて皆で先を争って抱っこしました。

荒尾教会は、牧師夫人が、幼稚園の教師をなさるという不文律があります。敬子先生も公平君を育てられ乍ら、幼稚園の仕事もされてました。また、礼拝の奏楽奉仕の出来る人は、幼稚園の戸田先生(信者)一人しかおられなくて、敬子先生は、奏楽の奉仕もなさってました。

当時、教会へは、両側に草の生い茂った細い坂道を上っていく道と、人家の間を通過して、会堂の正面に通じる道とがありました。教会と道路を隔てた月田の丘の上に住んでられた高崎姉(長老)が、狭い坂道を上り下りして、先生を訪ね、心を盡くしてられました。

浜辺先生の頃、私は、新米中学教師でした。教会学校教師として奉仕してました。教え子(中学生)に神様を伝えたいと教会へ誘いました。浜辺先生のお導きと、プリンク先生のバイブルクラスの御指導もあって、男女二十余名の中学生が教会に集い、神様を讚美しました。夏休みには、会堂に泊まって、ワークキャンプを兼ねた修養会をしました。幼稚園の行事の手伝いも彼等は進んでやりました。

クリスマススイブには、自転車を連れ、教会員の家を中心に、クリスマスキャロルを歌って、荒尾の街を走りまわりました。息をこらして、懐中電灯の明かりを合図に、「きよしこの夜」と讚美する一瞬の緊張を思い出しています。今より寒かったように思います。夜更けて教会に着くと、婦人会の方達が、暖かいぜんざいや、うどんを作ってくれて下さってました。クリスマス祝会にも、二十余名の中学生は、信徒の方々と共に集いました。

浜辺先生は、若さにあふれ、活気に満ちて、私たちをぐんぐん導いて下さいました。私も若く、勤務評定反対

や学力テスト反対と、当時の教育界を賑わした流れの中で、中学生と共に教会に連なり信仰を求め育てられました。今、彼等は、四十代後半から五十代に差しかかっています。創立五十年を機に集い、若き日に主に導かれた思いを新たにし、信仰を求める歩みを、ともに始めたいと願っています。

(平島ふさ子)

田中従夫先生時代の思い出

無牧の時期が、荒尾教会には、二度ありました。浜辺先生御転出後と、井柳先生御転出の後でした。

無牧の時、田中先生が、礼拝において下さる聖日以外は、橋姉、高崎姉を中心に、長老が交代で「奨励」をし、礼拝を守りました。私も、二度目の無牧の時は、長老の端に加えられていましたので、懸命に心を盡して、その責任を果たそうと努め、祈り、主の恵みの中に過ごしました。数少ない信徒で礼拝を守る時、育ってきた中学生、高校生が、聖日礼拝に出席し、求道し共に祈り、信徒の励みになってくれました。無牧の時も幼稚園は続けられました。運動会や夏のお泊まり保育の手伝いをはじめ、園庭の草刈りや、会堂の掃除は、中学生、高校生が進んでやってくれました。

荒尾教会に集う一人一人が、心をひとつにして教会を守りました。その大きな支えとなり導いて下さったのが、田中従夫先生でした。

田中先生に、私は、熊大在学中、坪井教会でもお導き頂きました。夏の修養会が、阿蘇山麓、栃木温泉でありました。旅館の下を流れる川のせせらぎに讚美歌がこだまして、信仰の交わりの幸せを満喫しました。裏山の木立の中での早天祈祷会の写真は、私の宝物です。田中先生が、あのにこやかな笑顔で写ってられるから……。

先生は、物腰柔らかな中に、一本芯の通った力強さも感じる先生でした。温厚で、優しく語りかけられる御説教は、丁寧で感銘を受けました。

無牧の時、外井昭男兄が召天されました。「人の未来で、ひとつだけ確かなことがある。それは誰でも必ず

「死ぬ」ということだ。私は……になるだろう。……するだろうというのは確かなことではない。人は必ず「死ぬ」ことだけは確かだ。だから、どう生きるかが問われる……。『告別式での田中先生の言葉が忘れられません。当時、二十八才の私は、「死」を考えたことはありませんでした。どう生きるかを問われている——と真剣に祈り求めました。その後、身近な母と夫を天国に送り、「死」と直面しました。敬愛する信仰の先達や親友前田久子姉も天国へ送りました。

今は、「死」は私にも必ず避けられないものと知りつつも、主をあがめ、主に従い主を証しすることの足りない私を責めています。

田中先生の「どう生きるか？」という問いかけに真っ直ぐ眼を上げて答えられる信仰を求めて、初心にかえり、これからの日々を生きていこうと思っています。

(平島ふさ子)

井柳福次郎先生時代の思い出

麦藁帽子をかぶり、真夏の太陽の下で、教会への赤土のこぼこ道の整備作業をしている中学生と高校生の中に、井柳先生も、ともにシャベルを握り働いてられます。

五十年誌に備えて、私も写真の整理をしました。浜辺先生の頃の中学生が高校生になり、無牧の時にも、後輩の中学生の面倒をみ乍ら幼稚園の運動会や、夏期保育のお手伝いをしていました。彼等が、井柳先生を迎えてハッスルして二泊三日の夏のワークキャンプをしている写真が……。麦藁帽子の先生の写真でした。無牧の時期、牧師先生をと祈り待っておりました信徒一同は、先生を大歓迎しました。

落ち着いた安心感をお若い先生から受けました。中学生や高校生も聖日礼拝に参加してましたが、先生は、順々とわかりやすく御説教して下さいました。その頃中学三年生で初めて教会に来た飯田美船姉(八戸北伝道所信徒)は、先生のお導きの中に成長した一人です。先生がよく勉強なさっていた姿を覚えています。

井柳先生も荒尾教会の時代に、みどり夫人と結婚なさいました。みどり夫人も幼稚園の先生としてお働き下さいました。礼拝の奏楽をみどり先生を待っていました。信仰を持って礼拝の奏楽奉仕ができることは素晴らしいと、私は中学生達に訴えました。今、八戸の飯田姉は、そのことを覚えていて、礼拝の奏楽の奉仕もなさってい

ると聞いて、神様の御計画の深さ、大きさに感謝しています。

井柳先生の頃、長老の端に加えられ、会計の責任を持っていましたが、経済的に弱く、先生に御苦労をおかけしましたことを改めて申し訳なく思い起こしています。

三川鉦の炭塵爆発があって、荒尾の街が騒然としていた年のクリスマスに、井柳先生を先頭に、悲しみの癒えない炭住街を「もろびとごぞりて・・・」と声高らかにクリスマスキャロルを歌って、自転車を走らせました。

荒尾の町、炭鉦と共に栄えた町の激動の最中に、先生は、荒尾教会を牧してられました。

当時も、教会へ通じる道は狭くでこぼこでした。伝道の歩みも、教会への道と同じく険しいものでした。九州

人の頑なな一面は、先生を苦しめたのではと今改めて思っています。

神様の思召しは計り知れず、先生に最初に導かれた飯田姉が、遠く八戸北伝道所で、小人数乍ら、牧師先生を支え、伝道に励み、幼稚園の教師として、信仰を証し、母として、妻として信仰にたつて生活しておられます。

彼女の原点は、井柳先生にお導き頂いたあの頃です。

(平島ふさ子)

樋口義也先生時代の思い出

一年余の無牧の後に、坪井教会の原水伝道所にいらした樋口先生が、私共の教会において下さいました。私はその日の感謝と喜びを思い起こしています。原水伝道所にいらした時から、先生御夫妻を存じ上げていました。

荒尾教会は、宮崎先生が伝道に心を盡くされた時より、教勢はさして伸びず、牧師先生の転任、無牧と沈滞しております。

樋口先生は、温厚な中に、芯の強さをお持ちで、しっかりと教会の舵取りをして、私たちを導いて下さいました。

恵子夫人は、坪井教会の牛島三郎長老の長女で、私は、熊大在学中、坪井教会での交わりがありました。恵子夫人も、幼い坊やを育て乍ら、幼稚園の先生をなさいました。教会員で礼拝の奏樂ができる人がいない教会でした。恵子先生は、奏樂の奉仕も御一人でなさいました。幼稚園にピアノもなく、恵子先生は御自分のピアノを寄贈されました。

幼稚園は、幼児の人口が減少し始めた時の流れとは反対に、市内に幼稚園が増えて、募集には「もの」を持参するという風潮の中で、大変な時期でした。教会の幼稚園としての使命にたつて、先生御夫妻は、牧会と共に幼稚園のためにおしにも力を盡くされました。当時は、教会堂が幼稚園でした。牧師館も、会堂の講壇の横の戸を開けたら、先生の書斎兼通路で結ばれた、十六年前、創立期に建てられた教会堂付属牧師館でした。

樋口先生は、会堂の北側に、幼稚園の為に二部屋増築することを計画され、祈りの中に完成しました。幼稚園が、三才児、四才児、五才児と、それぞれの部屋を持って、保育できるようになりました。

幼稚園には、荒尾市近郊からの通園もあって、先生が、御自分の車で朝夕の送迎をして下さいました。園バスのない時代でした。

恵子先生も、長女誕生前の身重の体で、車を運転され、御一緒に園児募集に廻って下さいました。当時は、自家用車を持ち、運転できる人の少ない時代でした。

幼稚園の第二の基礎を作ったのは、樋口先生と恵子先生だと思えます。

私の結婚式は、樋口先生の司式で、祝福を頂き、今も懐かしく感謝の思いでいっぱいです。

樋口先生は、信徒一人一人を理解し、相談にも暖かく答えて下さる包容力のある先生でした。先生の筋の通った芯の強い牧会の中で育て導いて頂いた日々を思い起こし、これからの歩みの指針としていこうと思っています。

(平島ふさ子)

出石高澄先生時代の思い出

岩高澄先生については、他の人が執筆しているので、違った視点から書くことにする。今はワープロと電子コピーが普及したため書類も殆どワープロに頼っているが、一昔前はガリ版または孔版とよばれた謄写版印刷で作られていたものだ。謄写版の原紙切りは難しくて綺麗な原紙は誰にでも簡単にできるものではなく、私などは苦手で一枚の原紙にも苦労したものだ。岩高先生はとても上手でおまけに早かったのには脱帽したものだ。教

会の週報や、お知らせ、幼稚園から園児の家庭に向けて定期的に発行する『園のたより』等の原紙を殆ど一人で切っておられた。今も手元にあるそれらの印刷物を見る度に当時のことが走馬灯のように脳裏に去来する。自動車の運転もお得意の分野であったようで、私たちもいろんな時に便乗させていた。時には幼稚園の送迎バスの運転もされていたが、途中で法令が変わって普通車の免許では、大型のマイクロバスの運転ができなくなつた時、すぐ自動車学校に通って大型免許を取得し、園バスを運転されていたのはついこの間のような気がするのに、指折り数えれば二十数年の歳月が流れていると思うと、光陰矢のごとしという古言が、いたいほどひしひしと感じられる昨今である。

音楽がお好きで、讚美歌第二編の歌も折りにふれ教えて戴いたけれど、私は生まれつきの音痴が災いして、今ではもう一人では歌うことができないようになってしまった。クラシック音楽がお好きで、よくレコードを聴いておられた。音楽についてのお話しも伺った。バロック音楽とはどういうものかとか、その他いろいろお聞きしたけれど、そのお話しも殆ど忘却の彼方に流れ去ってしまつて残念だ。それでも音楽に関する私の貧しい知識の一端はこの時に与えられたと思つて感謝している次第である。

(園田秀一郎)

荒尾教会と私

終戦の翌年昭和二十一年十月宮崎先生はお母様と故郷の荒尾にお帰りになりました。

荒尾に教会を子供達に愛をと宮崎先生の御計画そして伝道が始められました。熊本坪井教会の松木先生が毎月一回又は、二回と会を重ねられて先生のご苦勞を頂いて参りました。

松木先生と坪井教会の御力添えによって、坪井教会の荒尾伝道所としての新しい歩みを与えて下さいました。荒尾教会の設立には天に召された先輩兄弟姉妹方の大きな筆舌に尽くしがたいお働きが積み重ねられ、立派な献堂そして荒尾教会としての第一歩を踏み出しました。多くの方々の内外を問わず尊い御献身と御献金を頂きました。神様は、熱い祈りと希いを認めて下さり、荒尾に恵みと光を与えて下さいました。限りない感謝と喜びでございます。

歴代の先生方のお働きとその御苦勞下さいました事を思う時、熱いものがこみあげて参ります。亡高崎姉のご奉仕は、又格別でございました。

私は小作農家の半農半漁の多忙極める中で教会生活を守る事は皆無と言える程欠席の連続でしたが雨の日は喜びに明けくれる感謝の一日で、礼拝を守り、皆様との交わりの時を与えられました。牧野先生のおすすりによつて受洗を致しました。イエス様の十字架の贖いを信じる事が出来たら聖書の勉強はこれから続けなさいとお励ましを頂いて決心致しました。牧野先生が米國留学なさり、浜辺先生がお出で下さいましたと同時に出席できなくなりしました。

恥ずかしい事ばかりで何も記せませんが、神様は多くの兄弟姉妹方を通して絶えず呼びかけて下さり、一度捕らえた者を決してお見捨てにならない招き続けて下さる尊い愛の神様であることを信じて改めて心からの感謝と喜びを与えられました。岩高先生の御在職半ばから出席するようになりました。間もなく先生をお送りせねばならない、辛かったことを思います。小平先生をお迎えして二十二年のお働きを心より感謝申し上げます。

小平先生の伝道精神の熱い魂にふれて目がさめる思いで、教会の五十年の歳月に、そして自分の年令を振り返って驚き、足りないままの愚かな五十年でございます。この尊い五十年事業に携わって年老いる魂は又、逆に若々しく勇気を与えられて隣人を愛する奉仕と伝道に神様への一筋の思いを込めて五十年は六十年とそして百年へと文化に富む荒尾教会の発展の為に祈りと歩みを行きたいと思えます。

CSの子供達、めぐみ幼稚園の幼子達一人一人が日々明るく光の子として育まれています。歴代の先生方の尊い御苦勞の賜物に熱い感謝と喜びを申し上げます。次の世代をなう子供として、教団の中にあつて、教区地区での兄弟姉妹方との交わりを通して強くたくましく生かされます様に御恵みをお祈り申し上げます。

私の教会生活は、賀川豊彦先生の特別伝道集会から始まる。終戦後の混乱した世相を憂えた先生は、新日本建設キリスト運動という伝道活動を精力的に展開しておられた。電柱に貼られたポスターを見て、勤めが終わるとそのまま会場に直行した。会場は万田炭鉱の講堂であったが、さしもの広い講堂も満員の盛況で立錐の余地も無い有り様であった。賀川先生は、終戦直後の東久邇宮内閣の参与などを歴任され、戦時中は軍部に弾圧されたこともあり、発表当時空前のベストセラーになった小説「死線を越えて」の作者であり、日本社会党の創立メンバーとして、文字通り八面六臂の活躍をされていた時期であった。講演の前に黒田四郎先生の巧みな指導による讚美歌の練習があったが、これが私が生まれて初めて歌った讚美歌である。今も「うつりゆく世にもかわらで立てる（現行一三九）」や「世のたのしみうせゆき 人のなさけきえはて」（当時の歌詞・現行五〇九）を歌うと、四十数年前の伝道集会の光景を昨日のことに鮮やかに思い出すのである。

賀川先生は背後に白紙を止めて、筆で要点を大書しながらお話を進めていかれる。お話しに感激し決心カードを提出して、次週の礼拝から荒尾伝道所に出席するようになった。山野一吉兄も伝道集会に行ったとのことで、それから共に集会に出席するようになった。

荒尾伝道所にはまだ独立した建物ではなく、宮崎貞子先生のお住まいであった宮崎記念館での集会であった。聖日礼拝は二階の板の間で、祈禱会は畳の部屋で開かれていた。熊本から熊本坪井教会牧師の松木治三郎先生が毎月一度ほどお見えになり、礼拝や祈禱会などの集会が開かれていた。始めは先生のお話しが難しく殆ど分からなかったことも懐かしい思い出である。先生がお見えにならない時は、宮崎先生が奨励をされた。祈禱会では信徒が交替で奨励をした。そのためにもみな祈りながら、真剣に勉強をしたと思う。

今の若い人には信じられないかも知れないが当時は、出版事情もまだ悪くて聖書や讚美歌も思うように手に入らなかったものだ。聖書はアメリカの聖書協会から贈られたビニール装の新約聖書と讚美歌百選というダイジェ

スト版を求めることができた。この讚美歌集にはときには歌おうと思っても載っていないこともあって、随分不便な思いをしたことも懐かしい思い出だ。完全版を入手したのは大分後のことであったと思う。

会堂ができるまで、集会が開かれていた宮崎記念館について記しておきたい。現在宮崎兄弟資料館が建っている地に、宮崎家は代々住んでいて、長兄八郎をはじめ宮崎兄弟も全てその家で生まれ育ったのである。後に事情があつてこの家は人手に渡ってしまったのである。昭和の初頭蔣介石が北伐を完了し、政権を執って国民政府を作った後、孫文を助けてくれた宮崎家の家屋敷が、人手に渡ったことを知った国民政府が、孫文とゆかりのある家を買戻すための資金として二万元（一万円）を届けてくれたので、買い戻す交渉をしたものの話がまとまらぬため、海岸の下磯に土地を求め、そこに二階建木造モルタル塗洋館が建てられた。当時は孫文記念館と呼ばれていた。階下が八畳・六畳がそれぞれ二間、二階が十五畳の広間と八畳二間があり、玄関の真上には中華民国の国旗のある青天白日のしるし（戦時中に外された）二階の欄間にはその透かし彫り（これは戦時中も外されなかった）があつた。また玄関前に納骨堂が設けられ、正面に蔣作賓の筆になる「宮崎家之墓」という文字が彫られている。【一部は麦田静雄著荒尾史話（第四巻）による】

私はこの伝道所で一九四九年四月十七日（イースター）山野一吉兄と共に、松木先生から受洗したのである。

会社の転勤により一九八〇年に大阪から長洲に来て以来、荒尾教会にお世話になっていきます。荒尾教会五十年の歩みの中で、十六年の月日を荒尾教会で過ごし、その間にイエス・キリストをわが救い主と信じさせていただき、一九八一年に洗礼を小平先生より授けて頂きました。私のようなものをも愛して下さるといふ神様に心より感謝し教会生活を続けてまいっております。そして、神さまはこのような私にも伴侶を備えて下さり、今は三人の子供もまでも与えて下さり、クリスチャンホームとしての歩みをさせていただいています。神さまの恵みを改めて思うと共に小平先生御夫妻はじめ信徒の方々に感謝の気持ちで一杯です。

どこの教会に行くかは自分で選んだように思っていました。今振り返ってみれば神さまの深い御心によりこの荒尾教会に導かれたものと思います。

現在微力ながら荒尾教会の役員・教会学校教師をして五十周年記念墓地委員、幼稚園の評議員など様々な奉仕をさせていただいています。小さな教会ではだれかが何らかの責任を負わざるを得ません。様々な主の御用にあたる中にも、自分の力のなさ、知恵のなさに失望することが幾度もありますが、祈りをもって支えて下さる兄弟姉妹に助けられ、また神さまに祈ることにより力を与えられて今まで歩んでこれたと思います。

これからも足りない者ですがただ主の御力を信じ、荒尾教会と共に私の歩みもすすめていきたいと思っております。そして荒尾教会がますます主の栄光をあらわす教会として力強く進んでいけるよう願ってやみません。

荒尾教会と私

私は大牟田市で生まれ、クリスチャンホームに育ちました。小さい時から日曜日は教会に行くという生活でした。父は仕事に行きながら教会の長老、教会学校の教師と毎週忙しくしていましたけれど、それがあたりまえのように思っていました。

友達によく日曜日になると買い物や旅行など行っていたのをみるとうらやましくなる時もありました。でも父は、牧師先生のこと、教会員のことがいとも心にあっただようでした。そういう父の姿を見ていましたので、私も父のような優しくステキな人になりたいと思ひ二十歳になり受洗をしました。それから教会学校の先生、奏樂の奉仕をするようになりました。

私は、結婚で荒尾に嫁ぎ、長男の入園がきっかけで荒尾教会の教会員となることが出き、奏樂の奉仕と教会学校の奉仕が出来ますことを、今感謝しています。神様はちゃんと私に道を備えて下さったことを今嬉しく、感謝しています。これから荒尾教会に多くの友を導き、神様の栄光をあらわしていくことが出来ますように祈ります。荒尾教会の兄弟姉妹はとっても温かみのある方ばかりで教会に行つて皆さんに逢うのが今楽しみです。この温かみのある教会にこれからもしていきたいと願っています。これからも教会学校と奏樂の奉仕を喜んでしていきたいと思っています。

草創期に在って

山野 一吉

一九四八年十一月、賀川豊彦先生が、来荒された。坪井教会（現・錦ヶ丘教会）と荒尾伝道所合同の秋季の伝道集会であった。外井兄に案内をうけて、講演を聞きに行った。神の存在と宇宙についての内容に、すっかり吸い込まれていた。その後、三晩方で坑内の仕事をしながら、考えざるを得なかった。二・三日してから、早速荒尾伝道所の門をたたいた。

私が初めて荒尾教会の礼拝に出席させていただいたのは、二十四才の春でした。聖書の神様こそ天地創造の本當の神様だと確信できた私は、その神様を礼拝している、教会という所に行きたいという思いにかられていました。三浦綾子さんに傾倒していたので、三浦さんの通っておられる教会と同じ系列の教会に行きたいと思って探している内、荒尾教会の存在を知ったのでした。

教会に通い始めた当初は、神様と自分の関係は、とても大切に思っていました。信徒間の交わりについては、あまり重きをおいていませんでした。ともかく礼拝だけ守ればそれでいいと思ひ、その後の集会には、なかなか参加する気になれずいました。

しかし、その一方で、周囲の誰一人、自分の信仰を理解してくれる人もいない中、礼拝で何人もの人々と共に「アーメン」と唱えることが、何とも嬉しく感じられました。信仰を語りあえる友が欲しいという思いも募ってきました。牧師先生のお誘いに応じて、集会に残るようになり、信徒の方々と交わりを持つようになる内、信仰は励まされ、イエス様に対する確信は深まってきました。いつもごく自然にあたたかく受け入れて下さる雰囲気なふれ、この教会に来て良かったと、嬉しく思うようになりました。

その後、受洗にあずかり、クリスチャンホームも与えられましたが、今更ながら、その蔭に兄弟姉妹の方々の深い祈りをいただいたことを思います。家庭を持ち、子育てに奮闘する日々の中にも、様々な形で励まし、祈って頂き、支えを頂きました。

荒尾教会で神様と出合い、多くの兄弟姉妹と出合い、弱さも欠けも許し、受け入れて頂きながら交わりを深めてくれましたことを感謝しています。これからも主にある恵みと祝福に満ちた人生を、信仰の友と一緒に歩んでいけたらと願っています。

芒尻尾教会と私

告 桂子

大牟田の教会で洗礼を受け二十年が過ぎようとしています。信仰が未熟で月日だけが過ぎたようです。荒尾に引越して来てから、子供がぐみ幼稚園に行き初めてから、荒尾教会に行き始めました。それまで礼拝人数が七十名ぐらいの教会でしたので荒尾教会のように、家庭的な雰囲気のある教会は初めてで、少し戸惑いがありました。讃美歌を歌っていても、声が大いなので、自分で歌っていて、恥ずかしくなりました。それに皆さんとても仲が良くて、なかなかその中に入り込めなくて、少し悩みました。でも、その悩みを通して自分の信仰を今一度、考え反省させられました。大牟田教会では、信仰を持つ前の私と信仰を持ってからの私を見て下さっていました。でも荒尾教会では信仰を持ったクリスチャンとして見られました。その時に今までの自分の信仰の甘さ、弱さを痛切に感じさせられました。でも感謝もしました。その中で、神様に祈りつつ自分から輪の中に入れるように努力しました。

今は死ぬまで荒尾教会で礼拝を守って行こうと思っています。奉仕も満足にできない私ですけど、しっかり頑張っています。

また四月より婦人会で「ぶどうの会」の集会を月に一回持っています。それがとても楽しみです。四、五名の集まりの中で、自分の信仰の事、子育ての事、家庭の事、主人の事、いろいろな悩み、聞いてほしい事などとても話やすい場所です。この輪をもっともって広げて、たくさんの方が荒尾教会に来るように祈りつつ頑張っています。

私が荒尾教会の礼拝に出席するようになったのは、一九八六年（昭和六十一年）の二月からだだったと思います。今から約十年前の二月です。キッカケは、私は短波放送を聞くのが好きで、短波のラジオを買って聞いていましたら、K T W Rの放送が偶然入って来て、ずっと聞いていますと、それが短波の日本向けのキリスト教放送ということが分かりました。大変受信状態も良好でずっと聞いていました。その当時、私は精神的な病にかかっていたこともあって、何かに救いを求めていたこともあって、その放送の中に、火曜日の「明日への窓」という番組があり、教会紹介をしている事を知り、一度キリスト教会へ行ってみようと思いい、葉書を出して、近くの教会への紹介状を書いてもらって、最初は荒尾のルーテル教会を紹介されたので、ルーテル教会へ行きましたら、土曜日の昼からしか礼拝をやっていないことを聞き、行けないなと思いい、どこか他にキリスト教会はないかと考えていましたら、以前、荒尾市立図書館へ行く道の手前に、日本キリスト教団荒尾教会の看板が出ていたのを思い出し、この教会に放送局からの紹介状を持って、礼拝に訪れました。最初は礼拝堂に入ろうか、入るまいかと、礼拝堂の前をウロウロして迷っていましたが、現在は亡くなられて天に召された長老の白谷さんが、丁度玄関の前に出て来られて、「何しに来られたのですか。」と聞かれたので、私が「礼拝に来ました。」と答えたら、礼拝堂の中に入れてくださいました。その時は、礼拝の途中で、丁度私が中学の音楽の時間に習った歌の、「いつくしみ深き友なるイエスは」の讃美歌を歌われていて、私も席に着いて、一緒に歌い出すと、涙があふれ出て来て止まりませんでした。

その日以来、荒尾教会へ毎週日曜日は礼拝に行くようになりました。そして、一年後の一九八七年の六月七日のペンテコステの日に洗礼を受けました。途中、一年半位荒尾教会を離れて、他のキリスト教会の礼拝に出たりしていましたが、神様の導きで、又荒尾教会に戻って来て今日に至っています。今も、仕事のことや家庭内での信仰の違いで、悩んだり、苦しんだり、神様から離れてしまおうとする気持ちがありますが、人間の道として、

神から与えられた信仰を、自分で棄てたり、神様から離れてしまふべきではなく、祈りながら、神様に従って行くべきだと思います。神の御意（みこころ）であれば、心身共に健康を与えられて、どんな困難や苦しみにも耐えて、自分一人だけではなく、出来るだけ周りの多くの人々と共に、天の御国へ入れて頂ければと願っています。

私が初めて教会へ行ったのは、佐賀県有田教会でした。(一九五五年)妻が教会員でしたので、有田教会で結婚式を十一月に致し、結婚後大牟田市船津町へ帰り、大牟田正山町教会で一九五五年十二月二十五日平田尾次郎牧師より、八名の兄弟と共に受洗致しました。一九五六年三月有田町へ転出、父が三池港務所を定年退職と同時に、有田町より荒尾市へ転居し三十九年になります。荒尾教会での信仰生活は、浜辺牧師時代です。当時は市民病院入院中でしたが、毎週木曜日の午後浜辺牧師が、病院集会をされておられました。私は、戸田さんよりお話しを聞いて出席するようになりました。岩岡牧師夫人、戸田さん、美枝子さん、宮本さん、かほるさん、NHK記者の福田さん、カトリック教会の信徒の方など兄弟二十名の方が出席していました。退院半年後より礼拝、祈禱会へ出席するようになり心を新たに信仰生活を致すようになりました。

私が教会へ出席するようになってから、四名の牧師が変わり、この間に一年間の無牧時代が、我々信徒に対して無駄でなく逆に、勇気と信仰心が熟し数年後に、新会堂建設へと進み現在の会堂を建てる事が出来たと確信しています。

私は、井柳牧師の時に長老の奉仕をたまわり、辞退するまで三十数年間務めて参りました。

私は、信仰生活の中で礼拝を守り、長老、教会学校教師の奉仕がキリスト者としての基本であると思っております。

今後は残り少ない人生の時間を有効に使い、悔いのない信仰生活を続けていきたいと思っております。

荒尾教会と私

本田 輝子

荒尾教会が今年五十周年を迎える事を知り、その年に教会の一員にされた事を心より感謝しています。

この五十年の教会の歩みの中でなされた主の恵みとその恵みに答えた信仰篤い先輩方の信仰にふれる機会が与えられて、自分の信仰の励みにしたいと願っています。

教会の歩みと共に、四十五年もの歴史のある幼稚園教育にも目を向けたいと思っております。幼児教育を通し、父母、家庭、地域に多大の貢献がなされた事も感謝です。

主がこの土地にお建てになったこの教会を通して、主の愛と恵みが人々の心を救い、感謝と喜び、平安の日々を過ごすこの良き知らせを一人でも多くの人々に分かち合いたいと思っております。

婦人会の働きの一つにと、原田弥生姉の呼び掛けによって、聖書に関心を持ち、日々の生活の中で起こる、色々な事を話し合う場にしたと家庭集会を持ちました。集まる方々は教会のめぐみ幼稚園の卒園生のお母さんの木村麗子さん、原田姉の友人小山西京子さん、告桂子姉と私です。名前も「ぶどうの会」としました。第一回は一九九六年五月二十八日午前十時三十分、告姉の司会で讃美歌を歌い、聖書を拝読して始められました。この会を皆さん楽しみにしていた方々でしたので、初めてお会いする方もありましたのに、とても親しくお話しが出来て、楽しい時を過ごしました。聖書の御言葉によって励まされた立証があったり、求道時代の話が出来たりと予定より時間が大きくずれてしまいました。次回の日時を決めて、主の祈りで終わりました。第二回目は六月二十五日でした。この日も前回より一段と楽しい時が与えられて感謝のうちに終わり、次回は七月九日に持つ事としました。この会の為に永い事祈り、準備して下さり、家庭まで開放して下さいる原田家と弥生姉に心より感謝します。また会の上に主の恵みと祝福があり、一人でも多くの方の集まりを祈ります。

一九七四年五月、私達家族は荒尾へとやって来ました。その時四歳であった私もその日の事はよく覚えています。教会員の温かいお出迎えの中でも緊張していた様子を。

あの日から早くも二十二年が経ちました。その年月を振り返ってみると、多くの方々から祈って頂き、成長できた事に感謝せずにはいられません。

私の生活は、まさに教会と共にある日々でした。幼い頃から教会学校へ通い、讚美する事の喜びを知り、行事の前には両親が準備をする様子を見てはその大変さを感じ、大好きなクリスマスには、本物のクリスマスは教会で迎えるものである事に誇りを覚え、また教会員、求道者との交わりの中で、神様と共に生きる事の素晴らしさを実感しました。高校、大学は荒尾を離れ、キリスト教主義の学校に通いました。北九州、京都のそれぞれの地の学校や教会生活の中で、強い信仰を持った先生方や人々と出会う事によって、私の信仰も深められ奉仕する喜びを教えられました。

私自身の成長と共にこの二十二年間、荒尾教会も成長していったと思います。それは、教会員が互いに祈り合い、支え合う事により会堂建築もできました。そして、今年荒尾教会も五十周年を迎える事ができました。五十年前の信徒の方々の祈りは「神様の為に力を合わせて働き、奉仕する事」であったと思います。恵まれた私達の生活から考えるとその御努力には感銘致します。

今後の私達の祈りは、教会の内だけでなく日本、世界へと目を向ける広い視野を持つ事でしょう。神様から頂いた賜物を生かして私達も神様の為に力を合わせて働いていきたいと思えます。

幼い頃、夕方になると有明海に映える夕陽が対岸（佐賀）へと沈んで行く様を見ていると、不思議に落ち着いた気持ちになりました。忙しい中でも心を合わせて共に祈り、神様の偉大な力と愛に守られていることをいつも感謝しつつ歩んでまいりたいと思います。

荒尾教会と私

平島フサ子

宮崎貞子先生に、教会学校へのお誘いを頂いたのは、一九四七年、旧制女学校二年（中二）の若葉もえる五月でした。母も、「我が儘な私にとって良いことだ」と、自らも若い日に教会に通っていたので勧めてくれました。孫文記念館の二階で、足のしびれと戦い乍ら、松木牧師や宮崎先生のお説教を、よく理解出来ないのに、一生懸命きました。

「汝の若き日に、汝の創り主をおぼえよ」コヘルトの言葉（伝道の書）十二章一節を、改めて思いおこします。

宮崎先生のお導きで、神様に捉えられました。一九四九年の復活祭に、信仰告白をし、松木治三郎牧師より洗礼をうけました。

大学の卒論は、旧約の「ヨブ記」にとりくみました。ヨブの信仰に打たれました。

一九五六年、教職について、「信仰の証」をする教師でありたいと願い、CSの奉仕と中学生や高校生を育てることに努めました。

浜辺牧師が転任なさった後と、井柳牧師が転任なさった後の無牧の時代は、中高生が幼稚園の運動会の奉仕をはじめ、草刈り、会堂の掃除等、若い力で教会を支え、信仰弱き私は、励まされ、彼等に育てられました。

無牧の時代、田中従夫牧師において頂けない聖日は、長老が交代で「証」をしました。端に加えられていた私は、懸命に聖書に学びました。宗教书を読みました。祈りました！

私の若い日々は、荒尾教会と切っても切れないものでした。樋口牧師の時代まで走り続けました。それから、世俗にまみれ、怠けました。只、中学教師としては、信仰を与えられた者としての生き様で、生徒達に接して来ました。

今、荒尾教会の五十年の歩みと自らを重ねた時、主の恵みの中に生かされたことを改めて感謝すると共に、足

りない自分を恥じております。こんな私をも、主が捉えていて下さることを忘れず、これから主のお導きのまま、教会の一枝として、宮崎先生の祈りを受け継ぐ生き方をしたいと思っています。

大切な場所 荒尾教会云

小平真希子

生後二カ月の時私は、両親と姉と共に荒尾の地に越して来た。あれから二十二年。荒尾の地を離れ、遠くで生活している今では、荒尾教会で過ごした日々をとて懐かしく思う。

牧師を父に持つ家庭に生まれた私は、自分が教会に通い始めたのがいつからなのか覚えていない。自分では覚えていない程小さな時から両親に連れられて通い始めた教会。荒尾教会での教会生活も荒尾に越して来た時から始まった。教会に行く事が当たり前の環境の中で育った為だろう、教会に行く事に何の疑問も持たず自然と教会に通い始め、自然に教会に行く事を受け入れていたのだ。物心ついた頃には姉と二人で教会学校に通っていたし、大人の礼拝の間には母の隣りで絵本を読んでいた自分の姿を昨日の事のように覚えていて。

教会ではいつも人の優しさに触れていて、常に安心感があった。幼い頃からイエス様のお話しを聞き、讃美歌を歌い、お祈りをし、多くの人の優しさに触れた事で、感謝する気持ち、人に優しくする気持ちを自然に身につけたように思う。このような環境で育った事を今、感謝したい。

高校入学と同時に親元を離れ寮生活を始め、大学入学と同時に上京し、そして、東京で就職した。現在は石神井教会で礼拝を守っている。今では殆ど荒尾に帰る機会がないが、荒尾教会には幼い頃安心感があったように、今でもたまに帰って礼拝に出席すると安堵感を覚える。私の幼い頃の思い出がそうさせるのである。

多くの人と接し、多くの人の愛情に包まれて育った場所、そして何よりも神様と出会ったとても大切な場所、それが荒尾教会である。

五十周年を迎えた今年。さらなる発展を願うと共に、いつまでも誰の心をも安心させてくれる場所であってほしいと願う。

荒尾教会の創立五十年、おめでとうございます。私に荒尾教会の思い出を語る資格などないと思いますが、記憶をたぐり寄せたいと思います。

長かった子育ての時を終えて今、やっと一息ついているのですが、荒尾教会という空間の中で過ごした数年がどれ程貴重な時間（とき）であったことか、改めて自分自身をみつめ直しています。

めぐみ幼稚園の教師、日曜学校の先生、青年会の一人として教会員の一人として年令差を越えた人達の交わりの中で育まれた心の糧が、その後の私の生きてきた道の中でどれほど支えられたことか—— 実感しております。

牧野先生、光子先生、浜辺先生御夫妻とそれにつながる思い出、幼稚園での戸田先生達との思い出、青年会での修養会のことなど、何と多くの人達と出会い、生きていた私の中にもいるのです。この教会での思い出は幾層にも重なり、また一本の糸となって今の私にずっとつながっているのだと確信し、感謝の気持ちで一杯です。

現在の私は教会活動も出来ないし、その外のお手伝いも本当にできませんが、いつの日か、家のくびきをほどき、自己確立を果たして教会活動が出来るのを待ちたいと思うし、頑張りたいと思っています。

高崎さんや、橘さんの偉大さが実年令に近くなってみると分かり、自分のあやふやな生き方が恥ずかしくなります。四十年前前、いつも端正な着物姿で讃美歌を歌っておられた姿がふと蘇り、懐かしさと素晴らしい出会いを与えて頂いた教会に感謝しております。教会の発展を祈ります。

それぞれ思い出

清水 裕美

めぐみ幼稚園へ、二年間、狭いでこぼこ道を通いました。園へは、石の階段が続いていて、雨の日は、大変でした。その頃は、まわりも、畑と草地で子供心によく男の子と暴れまわっていたようです。自然の中の幼稚園時代を過ごしました。牧野牧師がお出でになっていた頃です。小学校へ入ると、教会学校へも楽しみで行っておりました。山野先生が、ベレー帽姿でお若かったのを覚えております。浜辺牧師ご夫妻にもかわいがっていただきました。

短大を卒業して二年たらず、幼稚園のお手伝いをさせて頂き、自閉症児をお二人預かっていましたので、一日中外を走ったりと、大変でしたが、とてもいい勉強をさせて頂きました。又、園舎が、日曜日になると礼拝堂へと変わる為、長椅子を出したり入れたり……。土曜日は忙しかった記憶があります。教会の週報もその頃、読みづらい字で書かせて頂き、ガリ版刷りをしていました。岩高牧師から小平牧師へとお変わりになった頃です。

その後、立派な教会が建ったのですね……。子供が幼稚園へ通い始め、上の子、下の子と六年間お世話になり、母の会の役員もさせて頂き、随分園へも日参いたしました。今もその頃のお母様方とは、親しくさせていただきます、私の財産です。

五十周年を迎えられ、まわりの景色や環境は随分変化しましたが、それぞれの思い出の一杯つまった「めぐみ幼稚園」が「荒尾教会」が、皆様の強い支えで、元気なのが、とても嬉しく思います。それと共に、私自身いつまでも関わらせて頂き感謝致します。

これからも益々ご発展いただき、小平牧師先生、恵子先生がいつまでもお元気で守って下さいますように、心よりお祈り申し上げます。

五十周年、おめでとうございます。

私が荒尾教会の存在を知ったのは高校三年の時でした。当時の荒尾教会は周囲には未だ人家も少なく、有明海を一望出来る現在の丘の上に小さな赤い屋根の建物で十字架があり、やっと教会がそこに在る事が判る、小さな教会でした。

しかし、その風景は童話の絵本に出てくる様な、青い丘の上の赤い屋根の素敵な雰囲気と自然と調和した、教会の存在があり、心の和む風景であったことを覚えていきます。

ここに荒尾教会五十周年にあたり、記念誌に寄稿できる機会を与えて頂き感謝の念と共に、荒尾教会の五十年の歴史と、その重みと地域に与えたキリスト教の布教による地域への貢献そして、あらためて神の御恵みの深さを感じます。

当時は若い牧師先生でしたので青年の集いも多く、青年部の方々と登山などしたことが思い出として有ります。その後これ又、小さな幼稚園が開設され、私の長男（英之）がお世話になりました。

その後幾代かの牧師先生が変わりましたが、相変わらずの小さな存在でした。しかし熱心で敬虔な多くの信徒に恵まれ、布教は広まり、今の小平牧師先生が赴任され、瞬く間に教会も幼稚園も大きな立派な建物となり、ここに五十周年を迎える事が出来るのは、日本基督教団の支援と信者の皆様の協力もさることながら、私は小平牧師は事業家としてのセンスと能力の持ち主ではないかと尊敬いたしております。

私のキリスト教との御縁について申し述べれば、私の両親は大牟田市の三池町に生まれ育ち、青年時代からキリスト教に興味を持ち、サークル的に聖書の研究会を、友人の池田五市さんや、福井健夫さんを始め、十数人で行っておりました。

三人は結婚後も夫婦共にクリスチャンとして、各家庭で順番に家庭集会を開催しておりました。

当時大牟田にも教会はありましたが、全てカソリック系で、熊本の草葉町教会より、時折牧師先生にお出で頂

き講話や聖書の講義を受けていましたので、自宅の集会和毎年のクリスマスには私も参加いたす程度で、甚だ信仰薄い者でした。

池田さんは三池炭坑関連の炭坑用機制作会社の技術者で機械の設計技師として活躍されてきました。難しい機械との葛藤にも、又心を持たない機械にもイエス・キリストの教えや聖書の詞に、合い通じるものがある事を知り何度と無く機械とのトラブルの解決も助けられ、神の存在と力を知りまた、自分の未熟さと力の無さを知り絶望したときも勇気を与えて頂き、今日の自分があると申されていたことが思い出されます。

福井さんは女学校の先生で、教育にイエス・キリストの教えを啓蒙され、教え子の中より多くの敬虔なクリスチャンが育った事は言うまでもありません。

又、父の死後父が残した短歌や俳句をもとに素晴らしい遺稿集を発行して頂き、父の友人を始め、多くのかたに寄稿して頂き立派な遺稿集を五百冊作成致し、多数の方々に配布致し、今手元には数冊しか残って居らず、我が家のバイブルとして大切に保管いたしております。

私の幼少の記憶に、我が家には聖書や讃美歌が本棚に数冊有り、父の愛用の古びた聖書には他の者が触ることの出来ない威厳みたいなものがありました。ある時そっとページをめくると赤線や小さな字の書き込みが沢山あり、食事時等に皆に講話していた聖書の中の詞がすぐ判るようになって有りました。

私の父は養鶏場を営み、九州各地に養鶏の講師として訪れては、当時就職もなく自営の農業収入も少なく、苦しい生活の方々に副業に養鶏を進めておりました。そうした時も何時も聖書を持参しており、湯村さんはクリスチャンですかと尋ねられ、クリスチャンと名乗れる信仰はありませんが、イエス・キリストとの教えに少しでも近づきたいとは念願し、こうして聖書と共に生活致しております。と答えていたそうです。その為に地域の教会や牧師先生との親交もあって宮崎や鹿児島、はては沖縄、沖永良部島等からも実習生として中卒間もない若者が、教会や牧師先生の世話で我が家に数人住み込みで養鶏の勉強に来ていました。

今、彼らの中より養鶏の一大産地である宮崎、鹿児島で活躍している人がいますが、父の遺志が受け継がれていることを喜びと、神の意思と御恵みを感じております。

ある時、中年の背の高い中村さんが住み込みで養鶏研修生として来られました。大変敬虔なクリスチャンで父との会話も、鶏のことか聖書のことでした。後で将来牧師に成られる方だと知りました。その中村牧師の妹さんが小平牧師の奥様と聞き、驚きと神の縁結びにまでの心配りを感じました。

私の父が一九七七年七月、八十二歳で天に召され、その後池田さんご夫妻、そして私の母が、数年して又、福井様ご夫妻も天に召されました。幸いなことにはその都度、小平牧師先生い基督教による葬送の儀をして頂き、遺人の喜びはもとより、基督教には全く無縁の参列者の多くの方々より基督教による葬儀に初めて参列し深く感謝致しましたとお礼の詞を頂き、私共遺族も両親は死んでも神の御心を多くの方に福音する事は出来満足であろうと喜んでおります。

残された私は未だ信仰こころ薄く、仕事の多忙を理由に教会への足も遠くなってしまうましたが、私自身はクリスチャンとして恥じない日々で有りたいたいと念願しております。

最後に今、我々がやらねばならないことは何か考えるとき、世界平和の道程も未だ険しく、人類の繁栄も自然との調和もなにか危惧される今日、我々人類全てが、今一度世紀来変わらぬ（石器時代も科学の飛躍した二十世紀も）教えと、我々人類の救い主であり導き者でもある、イエス・キリストの教えと神の存在偉大さ、人間の弱さに気づき、一人でも多くの人々が福音の機会を得ることです。その為にも教会の果たす役割は大きく、荒尾教会の益々の信徒の増加と発展を念じ、人々の救いの力の成られ又、天なる父の御恵みが荒尾教会の上に来たらん事をお祈り致します。

アーメン

心のふるさと——荒尾教会

梶永富美枝

主の御名を讚美致します。

私共家族が荒尾を発って、上京したのは丁度一九八〇年、数えればもう十七年に入っているのですね。

東京の生活は三人の子供達が小、中、高校に通う成長期の真っ只中を駆け抜けていった、無我夢中の十年間でした。都会生活は潤いに欠け、時には息苦しく感じる事もありますが、私共はよく、のどかで、心優しい人達に出会えた荒尾教会の事を共通の思い出として語り合い、いつの間にか、ギスギスした心を癒して頂いたように思います。

子供達にとって教会学校はとても楽しい思い出で、よく山野先生の話をしていました。末の子は幼稚園で山野先生に一杯スナップ写真を撮って頂きました。アルバムをめくってはレンズの向こうの先生の優しい眼差しを感じます。もう荒尾の記憶は殆どない末っ子なのですが、私は熊本生まれといって誇りにしているのはこの幼稚園のスナップ写真のお蔭かなと思っています。

私自身も五年余りの荒尾教会生活はいつも私の心の支えであり、生活の出発点でした。そこから、ささやかなボランティア活動が始まったのも忘れられません。特に主人が一年間海外出張となり、教会の皆様が私共家族の事を祈って下さいました。帰国後、共に礼拝に出席するようになり、今に至る信仰生活の礎となった事は感謝で一杯です。その後、世の中の経済の浮沈に翻弄されるように、職業も度々変わり、東京から千葉へと移りました。その間、主人も受洗の恵みにあずかり、悩み多い中、いつも前向きに感謝しつつ歩んでこれたのも、本当に信仰のお蔭だと思えます。

今は二人だけの生活ですが、共に祈り合う日々を感謝しています。思えば荒尾教会は私共家族の心のふるさとです。

益々、神様に祝福され、荒尾教会が栄えますようお祈り致します。

母教会の創立五十周年を心よりお祝い申し上げます。人生の新しい旅立ちをさせていただいたのに、何のお役にもたず申し訳なく存じております。主キリストとの出会いにより今日までキリスト者として四十一年、伝道者として三十五年の生活を精一杯主に喜ばれる生き方をしてくることが出来たのではないかと考えております。その事に免じて御教会への不義理をお赦しただきたく願っております。

私は、一九五四（S.二十九）年三月に三池高校を卒業しましたが、その半年程前から自分の進むべき道は何かと考えるようになり、それまでの人生に対する夢のような考えから、現実問題として考えるようになって挫折してしまいました。まだ進むべき方向が定まっていなかったのです。家族の者たちは大学受験を勧めてくれました。当時我が家はまだ大学に行ける暮らし向きではありませんでしたが、「財産の代わりに教育だけは受けさせたい」という母の希望を、兄が聞き入れてくれたのです。しかし、高校三年間を自分のしたいことだけをして来て、受験勉強など全然していないため、合格出来るはずは無かったのに受験しました。その結果は、当然のことながら不合格でした。名前はトオルでも、試験は実力が無ければ通るはずがありません。

浪人一年目の春、友人たちは皆それぞれの大学に進学して、郷里を離れて行きました。周りを見渡した時、ただ一人残された自分を発見しました。その時のさびしさは口で言い表すことは出来ません。この時の挫折は、根底から覆すほどのものでありました。自己の無力と将来に対する絶望で打ちのめされてしまいました。お先真っ暗でした。すべてが虚しく、腹立たしく、生きている自分がいやでした。何回死ぬことを考えたでしょう。橋の上に立っては一思いに飛び込んでしまいたい、鉄道線路の側を通れば列車に身を投げたいと、何度思ったことでしょうか。母親に当たり散らすことや、時折映画を観ることで毎日辛うじてゴマ化していました。県境の三本だて八十円の小便臭い映画館に終わりまでいて、家までの一里の道を夜遅く、トボトボと歩いて帰った時のあの虚しさは、今でも決して忘れることが出来ません。

それから一年して今は亡き外井昭男さんと文学サークルで知り合ってすぐに無理やり誘われて教会に行くようになりました。最初はイヤイヤながら行きましたが、次第に聖書の中のイエス・キリストに惹きつけられて喜んで行くようになりました。また聖書を死に物狂いで読みました。もしこの中に自分を活かしてくれるものがなければ自分の人生はもうこれで終わりだという切羽詰まった思いで必死でした。そしてとうとうイエス・キリストの十字架を信じる事が出来、救われ、キリスト者として新生することができました。それは教会に足を踏み入れてわずか三カ月間の出来事でした。まさに魂のニヒリズムから解放されて、生き返ったのです。正に私は死から甦って、新しい人生を歩み始めることが出来たのです。

受洗した時、私を導いて下さった外井昭男さんが「あの時の顔は、死んだ顔だった」と言われた言葉を今も思い出します。外井昭男さんは初めて会った私の顔を見て、私が絶望のどん底にあって、死人の状態にあることを見て取ってくださったのです。私はその翌年四月に受洗して未だ一年も経たないのに伝道者となるべく神学校に入学いたしました。一年前までは想像だけに出来なかった全く新しい道を歩み始めたのです。主の御計画の不思議を思わずにおられません。

外井昭男さんや私の信仰を育てて下さった牧野富士男牧師や教会の皆さんとの出会いがなかったならば今の私はこの世に存在しなかったであろうと思います。そういう意味で荒尾教会は、私の人生の原点です。感謝のほかありません。

百年に向けて御教会がますます主のみ業にお励みになりますように心よりお祈り申し上げます。

荒尾教会創立五十周年との事、おめでとうございます。お守りの中、牧師先生を中心に会員の皆様のお支えで今日あることを、お慶び申し上げます。

振り返ってみますと、私が荒尾教会にお世話になりましたのは、昭和二十七年頃と思います。引き揚げ後、縁あって九州に住み、大連時代の後教会から遠ざかり、何処かに教会が、と思いルーテル教会を知り、そこで荒尾教会を教えて頂いたのが最初でした。

その後、宮崎先生の幾度かのお奨めにより、めぐみ幼稚園に勤めさせて頂き、田中先生より洗礼を受け、高松に移るまでの十年余りの私の歩みは、教会によって支えられて参りました。まだ、子供たちが幼かった頃は、緑ヶ丘の家で家庭集会を持って頂いたり、また主人が入院生活をしている時は、ずっと病院集会をもって励まして下さいました。教会には多くの先輩、宮崎先生、豊子先生、高崎、橘、大場、前田、岩岡、熊川、松尾、大内、森川、下田、西坂姉（当時の姓）また男性の信者、青年会の方々がおられ、今も皆様のお顔と、立派なお働きが目に見えます。幼稚園の運動会、遠足、クリスマス等には、青年会の方々が御協力下さって本当に心強く思いました。無牧時代には、私のような者も礼拝の司会や証しをさせて頂き、伝道とは、牧師先生だけにお任せするものではなく、会員皆が一体となって、お互いに励まし合いつつ、行うものだと思われ、これこそ神様の御恵みだと感謝しています。

過ぐる年、荒尾に行き、あの会堂兼園舎が立派に建て替えられ、とことこ坂道も整備され（事ある毎に高崎様宅へとんで行った道）昔をひとしお懐かしく感じました。

どうぞ今後も、荒尾教会が、良き伝道の場として、益々主の御栄えがあらわれますことをお祈り致します。

荒尾教会と私

飯田美舟（旧姓・酒井）

荒尾教会創立五十周年おめでとうございます。お知らせ八戸にていただきました。

荒尾教会がこの地に建てられた主の教会として時代と社会の中で益々豊かに御言葉が語られ、仕える教会としての働きが祝されますようお祈り致します。

高校生だった私も早四十後半を過ぎましたが、証しに立てられると今でもつい、荒尾教会での生活を語らずにはおられません。

平島先生（当時松尾）が、三中に赴任なさらなければ信仰を与えられる事はなかったかも知れません。神様の導きでした。

生きる事に精一杯の中、三池争議を子供の目で体験しました。人が人として生きる事の辛さ、悲しさを一杯見せられて育ってきていましたので、松尾先生と出会った時、あれがキリストの香りだったのでしょう。数限りなく思い出は湧いてきます。教会の帰り道よく説教の解説をして頂きました。殆ど何も分からない取るに足りない者にも、いつも温かく迎え、接して下さった当時の教会員の皆様ありがとうございました。

ヨハネ三章十六節の「一人も滅びないで」の御言葉、そしてレプタ二枚を捧げたやもめの信仰は、荒尾での求道生活と重なってきます。奥羽教区より教職謝儀互助献金の制度が提案された時は感激でした。もっと早くこの制度があったらと荒尾での現実が頭にこびりついて反対する人々に勇気を出して訴えた事がありました。思ってもなかなか支える事ができずおりました事を申し訳なく思っております。

いつも説教、礼拝に全身全霊を傾けていらした井柳福次郎先生、無牧の中、熊本から足を運んで下さった田中従夫先生、ただ通っているだけのようにな私にも優しい眼差しを傾けて頂きました。「プリンク先生！バイブルクラス私ドキドキでした！」樋口先生には何回かお会いしただけに、お手紙を頂いたり、赤羽（東京）まで門安頂きました。恵子先生には幼児教育に対する熱意を頂き、励まされました。

私は今、地域の問題（核然問題）を自らの召名として受け止め、宣べ伝える者の使命を与えられている岩田雅一牧師を柱に昨年五月、会員三名で八戸北伝道所を時（カイロス）の教会として立てられています。

一信徒の牧師解任要求から問題は二年の時を経て相方の道を新しく歩む事になりました。神の憐れみによって立てられた事を教えられ、この選択を神の御心と信じて歩んでいます。問題が生じた時、人間の思いではなく、神のみ旨を選びとれるよう祈って過ごしました。牧師は教会人として反核然の闘いの第一線に立たされ、生みの苦しみを負い、狭い内でもとりまく環境に困難も見え隠れしますが、「主活きたもう」事に励まされています。

「北伝道所を支える会」がおこされ、「全国募金」メッセージに励まされ、信じる者の幸いを与えられています。

荒尾教会と私

伊豆永理和

「図書館の横にキリスト教の教会があるわよ。」この母の一言が、私が荒尾教会と出会うきっかけとなりました。

短大の幼児教育科二年の幼稚園実習園を選ぶ時に、幼稚園、高校、短大とキリスト教の学校を進んで来たので、実習園もぜひ教会の幼稚園をと思っていた時でした。今思えば、この出会いも、きっと神様の、暖かい、お導きの業だったのでしょう。めぐみ幼稚園に、こうして実習させて頂き、十四年もの長い間、暖かい方々に守られ、何よりも神様に守られて、子ども達との時間を過ごして来た事を、深く感謝しています。

子ども達が、朝に、お帰りに、お食事の時に、いつもいつも、きらきらした目を、一時閉じ、小さい手を胸の前に組み、神様を思ってお祈りをする姿を毎日見ていられる事。何と素晴らしい姿でしょう。何と恵まれた毎日なのでしょう。

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。全ての事について感謝しなさい。」この聖書の言葉を、子ども達は日々、体全体で現しているように思います。そんな、きらきらと光り輝く光の子ども達に出会う事に導いて下さった神様に、荒尾教会に、深く深く感謝しています。

そして、これからも、毎日毎日神様に、喜ばれる光の子どもとして、私自身も、頑張りたいと思います。そして、荒尾教会が、たくさんの、神様の御恵みと愛を授かりますように、心から、お祈りしています。

私が初めて荒尾教会、荒尾めぐみ幼稚園と出会ったのは、幼稚園の時です。

幼稚園時代の思い出は、いつも手を組んでお祈りをしてたこと、生誕劇などです。それ以来私は、お祈りや、讚美歌などには、あまり関わる事ができませんでしたが、聖書だけは卒園の時に頂いた物があり、まだ字があまり読めなかった私は、いつも聖書を持ち歩き友達と先生ごっこや読み合いっこをした記憶があります。そして、聖書の中で好きな箇所があり、そのページを繰り返し読んではどういう意味なのだろうと考えていたこともあり、また、そういうふうにして遊びの中で、聖書と関わってきたこと、そしてまた、めぐみ幼稚園と出会えたことを嬉しく思います。

そして今、子供達と毎日のお祈り、讚美歌、園長先生からの聖書の言葉を聞いて、きっと子供達も大きくなった時に何か一つでも心に残してくれるだろうと思っています。

荒尾教会は、就職してから交わりを持つようになったのですが、ほのぼのとした雰囲気がありとても親切な方々ばかりで、楽しく礼拝に出席することができ、嬉しく思っています。

私達は、いつも神様に見守られて過ごしているということを忘れないようにしたいと思います。そして、これから一人でも多くの人々が教会、幼稚園と交わることができるようにお祈りしたいと思います。

荒尾教会と私

浦 礼子

「このちいさなおいのりをイエスさまのおなまえによっておささげします。アーメン」

小さな指を組み、欠席した友だち、病気の方、困っている方の為に、また豊かな自然の恵みを感謝してお祈りし、神様に見守られながら伸び伸びと遊びに熱中する光の子ども達がいまいます。

私にとって荒尾教会との出会いはこの荒尾めぐみ幼稚園に入園した日からです。

めぐみ幼稚園はとても大きな受け皿でした。嬉しい時に大声で笑い、悲しい時は涙を流して痛みを表す事ができました。また、子どもにとっては最高のごちそうの「遊び」を、体と心のすみずみで体験しました。そして、神様にお祈りをする事も、園を通して学びました。それはごく自然に幼い心にすっとやさしく伝えられた心でした。

そのうち私は将来、この大きな受け皿になりたい、そう思うようになりました。あの時のごちそうの味を、あの充実感のお手伝いをする事ができるならどんなに嬉しいだろうか。

現在、幸せな事に私はこのめぐみ幼稚園で光の子ども達と共に過ごす喜びを与えられています。自分なりに受け皿であるだろうか、と問い、与えられた仕事の意味を忘れることなく思い続けていきたいと思っています。

毎週土曜日の幼稚科礼拝、また聖日礼拝や特別礼拝の中で自分の心もより豊かに、広い視野を得られるよう、気持ちのアンテナ磨きを続けたいと思います。

礼拝の中で子ども達と口をそろえて聖書の言葉を繰り返します。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。全ての事について感謝しなさい。」その言葉を胸に、光の子ども達と共に育ちたいと願っています。神様と光の子ども達と私をつないでくれるかけ橋、それが私にとっての荒尾教会です。

私はまだ幼稚園の園児としていた頃を思い出してみると、毎週土曜日に献金を持って行っていたことや、幼稚園時代に歌っていた讚美歌が頭の中に残っています。クリスマス会では、キャンドルライトと、鉢植えの花を頂いたのも思い出しました。そして、この幼稚園に勤めるようになって、月一回日曜礼拝に参加させてもらっていますが、讚美歌ってこんなにきれいな歌だったんだなと、とても感動しました。子どもの頃は何も考えず、ただ歌っているだけでしたが今になって歌の美しさというのを感じた気がします。それからお説教の話聞きながら、自分の反省点や納得することがたくさんあり、その度に考えさせられます。また、教会の方々とも普段あまり会う機会はありませんが、礼拝を通して顔見知りになることができとても嬉しく思っています。

それから行事毎も幼稚園と合同で行われるようになり、花の日、収穫感謝祭、クリスマスでも教会の方々との関わりが多くなり、子ども達も身近に感じているような気がします。これからももっと幼稚園と教会の交流があったらいいなと思います。

昨年、久しぶりに教会のクリスマスに参加させてもらったのですが、とても暖かい雰囲気です。楽しい時間を過ごさせて頂きました。

今年五十周年でたくさん企画がされています。皆さんで築いてこられたこの荒尾教会がこれからも暖かく見守られ、もっと発展していくことをお祈りしています。

なつかしい荒尾教会、幼稚園

荒木由貴（旧姓 本山）

荒尾教会で、祈りが、ささげられるようになって五十年。半世紀に渡って、この荒尾の地で、聖日礼拝が守られ、幼稚園では、たくさんのお子が、神様の祝福をいっぱいにいただいで巣立っていかれたことでしょう。創立五十周年、おめでとうございます。

私は、十八年前、めぐみ幼稚園に、教師として、つとめさせてもらいました。春夏秋冬、幼い子供さん達と、過ごした六年間。毎日新しい発見があり、驚いたり、共に感動したり、楽しくて、私の人生の中で、充実した素晴らしい日々でした。今、大きく成長された卒園生が訪ねて来て下さったり、街で、お会いすることがあって、うれしく思います。同勤だった、山野先生、下田先生、佐久原先生、伊豆永先生、渡辺さん、森山さん、ほんとうにありがとうございます。そして、こんな私を、教育実習生の頃から、暖かく、見守ってくださった小平先生御夫妻に、深く感謝しております。

はやいもので、時は流れて、退職をして十二年。阿蘇へ行き、天草へ行き、十年ぶりに荒尾へ帰って来ました。この間、二人の子供を授かり、下の子供は、一年だけでしたが、めぐみ幼稚園に通うことができ、とても喜んでいきます。私と息子の大好きな聖句、「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことについて感謝しなさい。」で、いつも歩んで行きたいと思っていますが、なかなか難しいです。教会へも御無沙汰しておりますが、教会のみなさま、これから、どうぞ、よろしくお願い致します。

最後になりましたが、私に「愛のたね」をまいてくださった、山野先生、恵子先生が、病気で療養されています。はやくお元気になれますように、心からお祈りしています。荒尾教会、教会学校、めぐみ幼稚園の、お一人、お一人に、神様のお守りが、豊かにありますように。

日本基督教団荒尾教会創立記念講演

主題 「キリスト教と近代化」

東洋英和女学院大学人間科学部教授

浜辺達男

一九九六年十月二十七日

日本人にとって近代化とは、ヨーロッパ・アメリカの近代化に倣って、これを追隨する形態であった。ヨーロッパの近代化にはキリスト教の思潮が根底に前提されていた。自由の思想は宗教改革を契機にして、フランスにおける宗教戦争、ドイツにおける三十年戦争という血にまみれた百五十年を経て、新たにプロテスタント教会の存在を、既成事実としてカトリック教会が認知する、までに至って、ヨーロッパ全域に広がっていった。さらに百五十年を経て、フランス革命が起こり、思想的な自由の觀念が政治的自由に發展するに及び、近代化、国民国家の形成へと急激に進んで行くことになっていった。

遅く目覚めた日本にとって、ヨーロッパ諸国の近代化を模範にして、文明と共に、逸早く日本の近代化、国民国家の形成へと、一層の激しきをもって邁進しなければならぬ課題となった。これが明治維新の革命的國家形態の変化を起こさざるを得なかった理由であろう。その際、ヨーロッパ・アメリカの先進技術の追隨に目を奪われて、その根底にあるキリスト教の存在には、一部の人々を除いて、無視あるいは軽視してきたのであった。

先の十六世紀に日本に到来してきたキリシタンとは違って、プロテスタントはその教理の根底に「聖書」を据えていた。この聖書の前には、凡ての人が平等であることと、文字による合理的理解を求められる状況は、先のキリシタンの場合とは大きな相違を、当時の日本人に及ぼした、と言えよう。このような事実に触れた日本人の中から、聖書の翻訳と、近代的人間の新しい生き方を追求する、という例外的な人々が登場してきた。従来日本の伝統的な宗教生活を基盤としながらも、新しい生き方として、近代的な人間を憧れる人達が、次々に誕生してきた。政治家として森有礼、詩人・文学者として北村透谷、思想家・教育家として内村鑑三、社会運動家として田中正造が挙げられよう。これらの人物の周辺には、なお多くのキリスト教信者がいたが、明治二十年代からの、國家神道・天皇制イデオロギーによって圧迫され、弾圧されてキリスト教から離れていった人々も、後を断たなかった。それは近代的人間の形成の困難さに加えて、政治的に苦しみ悩む多くの若者群像を生み出した。

日清戦争・日露戦争に勝利した國家として、それ以後、富国強兵・軍部支配を嚮進して行かざるを得なかったのが、日本の不幸な近代化への道であった。先の第二次世界大戦の敗戦という歴史的事実を基盤にして歩み始めた五十年を踏まえて、今新たにキリスト教と「聖書」に学ぶには、それ以前の明治の人々の迷いと、挫折を直視

しなければならぬであろう。

聖書には、それまでの日本人が接したことがなかった、「新しい世界」が記されている。この世界を、「二つあること」と捉えてみたい。光の創造によって闇がもたらされ、男の登場に際して、「助けるもの」として女が誕生した。アブラハムの妻サラには、側女ハガルがあり、息子イサクにはイシマエルが対立している。ヤコブにはエソウが、ヤコブの妻ラケルには姉レアがいる。要約すれば、選ばれた人の影には、必ず選ばれなかった人々の群像が並ぶ。善の影には、常に悪が潜んでいる。両者の存在を認知して、それを区別するところから問題は発生しさらに展開して行く。ヘーゲル弁証法も「二つあること」を前提とする。

それらの考え方に対して、空海が説いた仏教は、山川草木悉皆成仏、と捉えることが出来よう。人間と自然を区別しないで、万物が御仏の慈悲によって生きていくというのである。人間を自然から区別しないでは、近代科学は成立しない。人間をつつんでいる「風景」としての自然を発見しないでは、近代絵画を描くことはできない。漢字的な概念による文体によっては、近代小説は描けなかった。言文一致の文体によって、初めて近代的な人間の問題を描くことが出来るようになった。これらの多くの文化的な困難に遭遇したのが明治時代の若者たちであった。一部の青年たちはキリスト教宣教師たちに接して、これらの新しい感覚に目覚め、西洋文明とともに、その根底にある「聖書」の「新しい世界」を垣間見て、それに憧れたのに違いない。聖書は文字で記されていても、その考え方は文字を超えて、世界中の多くの人々にとってなくてはならない人間の考えを超えた世界、神の世界の存在を告げている。二度に渉る世界大戦の悲惨な状況にあっても希望を失わなかった人の信仰基盤である。

「二つあること」の要点は人間の存在のむこう側に「神」が生きて働いている点である。そこに区別が歴然として在る、と言うことである。神は人間の世界を支配することができるが、人間は神を支配することは出来ない。人間は自由に生きることが許されているように見えるが、神の定めた生き方以外の生き方をする時、必ず裁かれ、人間として必ず挫折しない訳には行かないように作られている。自分と違う他者の「存在」を認めることが、自己認識に欠かせることが出来ないように、身近な友を他者として、日本の隣国を他者として、さらには永遠の世界にいます「神」を他者として見るのが、真の意味で近代化の基本である。